

「反ファシズム統一戦線」研究の新段階

——ソ連による「情報独占」崩壊期におけるコミンテルン評価の変貌

加藤 哲郎

1 ソ連の「情報独占」のもとでの「歴史の謎」

コミンテルン第七回大会の政策転換

コミンテルン(共産主義インタナショナル、第三インタナショナル、一九一九―四三年)の第七回世界大会(一九三五年七月八月)は、「反ファシズム統一戦線・人民戦線」をかかげた大会として、知られている。

コミンテルン第七回大会は、コミンテルンの歴史的母胎であり、そこから分裂して誕生した出自ゆえに近親相姦的に敵対しあってきた第二インタナショナルと社会民主主義への態度を変更をし、それをファシズムに対する共同闘争の相手として認知した。コミンテル

ンの創立理念は「世界革命」プロレタリアートの世界独裁」実現であったが、それに長く対置されてきた「ブルジョア民主主義」の評価を転換した。また、コミンテルンの組織構造においても、「単一世界政党」の理念は保持しつつも、各国支部に各国共産党の自主性を尊重する方向性をうちだした。

この政策転換については、重要な資料と情報の多くが、コミンテルン本部のあったモスクワのソ連邦共産党マルクス・レーニン主義研究所アルヒーフに「独占」されており、「未公開」であるという特殊な事情も重なって、従来から多くの学説が対立してきた。

かつての西欧諸国の研究の多くは、当時のコミンテ

ルンII各国共産党を、スターリンの支配下にあるソ連邦共産党およびソ連国家の意向を世界各地で代行する「衛星機関」と見なし、コミンテルン第七回大会の政策転換を、「ソ連外交の対独協調から対仏接近への変化に従属したもの」と説明してきた。⁽¹⁾

これに対して、わが国でもよく知られたレイブゾンIIシリニヤの『コミンテルンの政策転換』(一九六五年)やソ連邦ML研究所『共産主義インタナショナル——略史』(一九六九年)など、「スターリン批判」(一九五六年)以後のソ連・東欧の研究は、西側からはアクセスしえない未公開資料を小出ししながら、世界大恐慌、ナチスの政権掌握、世界戦争切迫という当時の「情勢変化」に対する国際共産主義運動の「適応」としてこれを分析し、ソ連邦国家II共産党と資本主義世界の労働者階級および共産党の「利害の一致」を前提として、フランス共産党の統一戦線・人民戦線に典型的な資本主義国共産党の「自主的・創造的」政策化過程であることを強調してきた。⁽²⁾

単純化していえば、「モスクワIIスターリン起源」説

と「パリIIフランス共産党起源」説の対抗であり、それが二〇世紀の歴史の大きな転換点とされ、資料的・文献的裏付けが困難な「歴史の謎」であったために、世界の数多くの研究者の関心を集めてきた。

大著『ソヴェト・ロシア史』全一〇巻一四冊をひとまず完成したE・H・カーが、晩年の研究対象に、この時期のコミンテルンを選んだのも、理由のあることであつた。⁽³⁾

内田健二による従来の研究と論点の整理

カーの遺作の一つとなつた『コミンテルンの黄昏——一九三〇—三五年』(一九八二年)の邦訳「訳者あとがき」に、ソヴェト政治史研究者である内田健二は、この問題での従来の四二の研究文献をリスト・アップしたうえで、その論点と諸説の分歧を整理している。⁽⁴⁾

その論点とは、(A)一九三〇年代前半のソ連外交に「転換」を見いだしうるか否かであり、①「対独志向(II非戦略転換)」説(タッカー、 Hoffmanら)、②「対西欧(対仏)志向」説(尾上正男、植田隆子ら)、③「同時追求」説(ウラムら)、④「二重外交」説(ハスラ

ム、横手慎二、平井友義ら)、と整理される。

そこに「転換」があったとすれば、(B)そのリーダーシップは誰によってとられたかであり、①「スターリン主導」説(ウラム、タッカーら)、②「リトヴィノフ外相主導」説(ハスラム、横手ら)に分かれる。

晩年のカーは、BⅡ②「リトヴィノフ重視」のAⅡ②「対西欧志向」説に位置づけられる。

内田は、コミンテルンの政策転換に関しては、「ソ連外交従属」説(ブラウンタール、ボルケナウら)の存在を前提としたうえで、(C)「転換の起源」についての学説を、五つの類型に整理している。

その①は、「モスクワソ連邦外交起源」説で、山極潔『コミンテルンと人民戦線』に代表されるといふ。

山極は、一九三四年一月二六日のソ連邦共産党第一七回大会スターリン報告を重視し、リーダーシップとしてはマヌイルスキーに注目して、フランス人民戦線も仏ソ条約締結と結びついているとする。ブラウンタールと平瀬徹也もフランス統一戦線をソ連外交に起因するとみるが、人民戦線への転換はトレーズに帰す見解

と整理される。

②として、「モスクワソ連指導部起源」説を、ヴァサールとボルケナウを例に挙げる。ここではソ連の国内政治の一定の「自由化」と、スターリンの承認をえたマヌイルスキーのイニシアティヴが重視される。

③は、「モスクワソ連バリエール」説ないし「バリエール内的要因重視」説と整理される。かつてのソ連・東欧の通説が「一体」説であり、前述『共産主義インタナショナル——略史』が典型とされる。「内発的要因重視」説としては、中木康夫『フランス政治史』が挙げられる。

④として、富永幸生他『ファシズムとコミンテルン』における西川正雄の分析と、私の一九七九年の論文「世界政党と政策転換(一九三四—三五年)」が、「統一戦線ソ連モスクワ起源、人民戦線バリエール起源」説と整理されている。つまり、①②の主張については結論を留保し、③の挙げる事態を「フランスの実験」と受けとめ、一九三四年七月のデIMITロフのスターリン宛手

紙を重視し、人民戦線についてはトレーズの役割を認めていたからだという。もっとも、西川が一九三五年段階でもコミンテルン内に根強い抵抗があった点を重視するのに対し、私の旧稿は、一九三四年二月のコミンテルン執行委員会段階で政策体系の転換を基本的に完了したとみていた微妙な差異にも、内田は目配りしている。

⑤が、カーの弟子ハスラム、および『コミンテルンの黄昏』でのカーの説で、「統一戦線Ⅱモスクワ・コミンテルン指導部、人民戦線Ⅱバリ起源」説と整理される。この場合、一九三四年二月のデIMITロフのモスクワ到着と四月のコミンテルン執行委員会政治書記局長・中欧局長への就任が重視される点が、④とは異なると思われる。

ここからまた、(D)「社会ファシズム」論からコミンテルン第七回大会への転換の内容について、①「反ファシズム統一戦線」と「人民戦線」を一続きのものとみるか、②論理的・段階的に区分するかの分岐が生まれ、(E)そのリーダーシップを、①スターリン、②

マヌイルスキー、③デIMITロフ、④トレーズのいずれに求めるかが論点となる。

私の旧稿の関心と立場

内田によってC-④と分類された私の旧稿の関心は、「転換」の内容として何を理解するか、『転換』の画期をどの時点におくか、『転換』のリーダーシップを誰にみるか、『転換』を『戦略』的なのとみるか、『戦術』的なのとみるか」と整理した学説上の論点それ自体というよりも、「その過程に表現される政治組織としてのコミンテルンの組織構造や行動・思考様式の特質」にあった。

それゆえに私は、「今日の段階では『転換』の内容・性格・意義、およびコミンテルン組織自体の基本的性格、組織構造、イデオロギー構造等をぬきにして、その『起源』を詮索することは不毛であると思われる。

こうした対立の起こってきた根拠のひとつに、ソ連邦共産党による当時の資料の『独占』があるのであり、この『資料独占』『情報独占』もコミンテルンの時代の歴史的遺産であるから、そのような行動・思考様式の

『起源』こそ問題にされねばならない」と注記して⁽⁵⁾いた。

私の旧稿が発表されたのは、国際共産主義運動の多
元化やユーロ・コミニズムの台頭を背景に、この
「政策転換」問題への関心の強まった時期であった。
国際的には、レイブゾン⁽⁶⁾シリニーの著作の改訂版
や東ドイツのレヴェレンツの研究、イタリアのアゴス
ティの資料集やボッフアの研究、内田が注目したタッ
カー、カーやハスラムらの研究が現れた。わが国では、
日本の学問的コミンテルン研究の画期を成した富永他
『ファシズムとコミンテルン』と村田陽一編訳『コミン
テルン資料集』全六巻の他、内田のリストの植田、山
極、横手らの研究が集中的に現れた。南塚信吾が、ソ
連・東欧での研究の到達点を整理したのも、この頃で
あった。⁽⁶⁾

2 「情報独占」の崩壊と新資料の登場

ペレストロイカのもたらした新資料

——スターリン対デイトロフ

だが、それがまた、新たな段階に入ろうとしている。
一九八五年のソ連におけるゴルバチョフ共産党書記長
の登場に始まり、一九八九年の中国天安門事件、ポー
ランド「連帯」政府、ハンガリーの国名変更、そして
「ベルリンの壁」崩壊からチェコスロヴァキア「ビロー
ドの革命」、ルーマニアのチャウシェスク独裁打倒に
いたる一連の動きは、これらの国の政権党⁽⁷⁾共産主義
前衛党の歴史的起源であったコミンテルンの意味を、
改めて問いかけるものであった。

「情報」との関わりでは、ゴルバチョフの「ペレスト
ロイカ」と「新思考」によってもたらされた「グラ
スノスチ⁽⁸⁾情報公開」により、これまでソ連邦共産党
が独占してきた史資料の一部が公開されてきた。

また、その帰結でもあった東欧市民革命によるレー
ニン⁽⁹⁾コミンテルン型共産党の崩壊によって、これま
で「コミンテルンの最大の功績」と讃えられてきた第
七回大会の「反ファシズム統一戦線」の意味が、問い
直されてきている。

資料の点では、スターリンのコミンテルンへの関わ

りが集中的に論じられることによって、政策転換過程でのスターリンの対応が、かなりの程度に明らかにされてきた。

例えば、私の旧稿や西川正雄の研究が特に注目し、ハスラムは全文を引用して画期とした、一九三四年七月一日のコミンテルン第七回大会議事日程第二項準備委員会へ提出されたディミトロフの書簡への、スターリンによる書き込みの一部が、ソ連邦のマルクス・レーニン主義研究所（一九九一年より「社会主義歴史理論研究所」と改称）の「党史研究イデオログ」であるフィルソフやシリニャの研究において、用いられはじめた。

それによると、スターリンは、ディミトロフの、「社会民主主義を十ば一からげに社会ファシズムと特徴づけるのは、正しいであろうか？」という問いに、

「指導部については正しい。しかし十ば一からげは正しくない」と答え、

「社会民主主義は、どこでもまたどんな事情のもとで

もブルジョアジーの主要な社会的支柱であると考えるのは、正しいであろうか？」という問いには、

「ベルシャでは、もちろんまちがいだ。資本主義主要国では、正しい」と書き込んだ。

そして、「左翼社会民主主義グループはすべて、どんな事情のもとでも主要な危険であると考えるのは、正しいであろうか？」というディミトロフの問いには、「客観的には、正しい」とスターリンはいう。

さらに、「闘争における労働者の真の統一をつくりだす真剣な努力もせずに、もっぱら社会民主主義を暴露するマヌーヴァーとして統一戦線戦術を適用するのではなく、われわれはこの戦術を、ファシズムの攻勢に反対する大衆闘争を展開するうえで効果的な要因に変えなければならない」というディミトロフの問題提起に対しては、「変えなければならないのか」「このテーゼは、一体だれに向けられているのか？」と、スターリンは欄外に書き込んだ。

これは、スターリンの社会民主主義観が、この一九三四年七月時点ではなお大きく変化してはおらず、デ

イミトロフの転換推進論に懐疑的であったこと、デイミトロフは、にもかかわらず、スターリンに彼の問題提起を直接ぶつけたことを意味する。⁽⁷⁾

コミンテルン指導部内部の転換への抵抗

——デイミトロフ対ビヤトニツキー

また、デイミトロフが(三四年)七月二日の準備委員会で、このスターリン宛書簡に付した「報告要綱」の内容を報告したさいの議事録の一部も、公表された。そのなかには、六月三〇日のドイツのレーム事件

(ヒットラーによるナチス突撃隊左派への粛清事件)の評価をめぐって、これを旧来のコミンテルンの路線の延長上で「ファシズムの危機、大衆的基盤喪失の証拠」とみるドイツ共産党指導部やビヤトニツキーとそれはファシズムの過小評価だとするデイミトロフとのあいだでの、次のようなやりとりも記されている。

デイミトロフが、古参のコミンテルン幹部会員・政治書記局員ビヤトニツキーの「大衆的基盤の喪失」という評価を、名指して批判した場面である。

ビヤトニツキー「おのぞみなら、撤回してもいいよ」

デイミトロフ「おねがいだから、このことをもっとまじめに考えてくれ」

ビヤトニツキー「誰も一人じゃきめられない、いつでも衝突は生まれるさ」

デイミトロフ「私の意見は、つまり、ドイツの今日の諸条件のもとでは、こうした大衆的基盤はもはや存在しないという考えは、間違っているだろうということだ」

ビヤトニツキー「デイミトロフ同志、それは何も前と変わっていないということかね？」

デイミトロフ「いや、そうではない」

ビヤトニツキー「それなら、僕は別に付け加えることはない。」

これは、コミンテルン執行委員会における転換への抵抗が、いかに根強かったかを示している。⁽⁸⁾

この資料を紹介したドイツのE・レーヴィン(労働運動史研究所)旧東独マルクス・レーニン主義研究所が一九九〇年に改称、一九一八—四五年期ドイツ及び国際労働運動史研究班主任)らは、そこにデイミトロ

フの「勇氣と努力」を読みとっている。⁽⁹⁾

しかし、こうした新資料の公表は——かつてのディミトロフ書簡そのものの公表のさいと同じように——、なお「脱スターリン化」という政治的目的に誘引された非公開資料の部分的・独占的使用という形式をともなっており、言葉の完全な意味での「グラーヌスノスチ」情報公開」にはほど遠い。その意味では、新しい段階とはいいいがたい。

3 「情報独占」崩壊期の歴史的評価の転換

第七回大会の単一労働者政党論と共産党一党独裁

ここで注目すべきは、むしろ、こうした新資料をも用いながら始まった、ソ連・東欧での新たなコミンテルン研究にはらまれる、新しい方向性である。

そこには、従来型の「脱スターリン化」のあり方、すなわち、ディミトロフやトレーズ・フランクス共産党の自主性・創造性と「スターリンの反対・妨害にもかかわらず」実現された反ファシズム統一戦線・人民戦線を強調することによって、「ソ連邦共産党の衛星機

関」にとどまらないコミンテルンの独自の存在意義を浮き彫りにする手法をなお色濃く残しながら、いくつかの点で——コミンテルン第七回大会そのものの存在意義を問い直す——新しい方向性も、現れてきている。

その第一は、大会決定の内容そのものの限界を、指摘するものである。この点は、従来も、例えば「資本主義の全般的危機」という時代認識の残存や「社会民主主義の危機・分化」を主たる理由としての自己批判なき「社会ファシズム」論放棄の問題などとして、語られてきたものである。

新たな論点は、ディミトロフ報告のいう「労働者階級の政治的統一」の問題である。それが、「一党制」共産党による社会民主主義政党の吸収合併」を志向し、戦後東欧諸国の社会民主主義政党と共産党の合併を通じてコミンテルン型共産主義政党による一党独裁に道を開いたものではなかったか、という問題提起である。

第七回大会ディミトロフ報告は、「ファシズムと資本の攻勢に反対する共産党系と社会民主党系の労働者の共同闘争の統一戦線が発展すれば、労働者階級の政

治的統一、その単一の大衆的政党の問題もまた生じてくる。……プロレタリアートの階級闘争の利益とプロレタリア革命の成功は、各国にプロレタリアートの単一の党が存在することを必要とする。……国際労働運動が分裂を清算する時期にはいりつつあるときに、労働者階級の諸勢力を単一の革命的プロレタリア党に統合する仕事、それはわれわれの仕事であり、共産主義インタナショナルの仕事である」と述べ、そのさいの条件を、①ブルジョアジーからの独立、②あらかじめの行動の統一、③ソヴェト形態でのプロレタリアートの独裁の必要の承認、④帝国主義戦争での自国ブルジョアジー支持の拒否、⑤民主主義的中央集権制、と挙げた。⁽¹⁰⁾

これは、すでに私の旧稿が、「加入条件二一カ条から五カ条への転換」として扱い、とりわけその五条件に③「ブルジョアジーを革命的に打倒し、ソヴェト形態でのプロレタリアートの独裁を打ち立てる必要の承認」や⑤「ロシアのボリシェヴィキの経験によって試験済みの、意思と行動の統一を保障する民主主義的中

央集権制にもとづいて党を建設すること」が含まれていた問題性を、指摘していたものである。⁽¹¹⁾

また、イタリアのスプリアーノも、同じ問題に着目し、デイミトロフ報告が、共産党と社会民主主義政党との統一・合同の問題を提起しながら、コミンテルン自身の「解散を提起しなかった」のは、社会民主主義者の共産党への吸収合併を念頭においた『組織的統一』の誤りであったと批判を加え、この視点は、アゴステイにも受け継がれていた。⁽¹²⁾

逆に、かつての東ドイツ時代のE・レーヴィンらの研究では、このデイミトロフの「労働者政党の統一」五条件が、「労働者階級の統一の最高の形態としての統一的大衆的政党」のあり方を定式化したものであり、戦後ドイツ民主共和国(DDR)の社会主義統一党(SED)誕生(一九四六年)をはじめとした東欧諸国の「ファシズム打倒後の労働者の統一政党結成の重要な基礎をつくった」ものとして、高く評価されていた。⁽¹³⁾

一九八九年東欧市民革命は、この「労働者階級は統

一しなければならぬから、労働者政党も一つでなければならぬ」というディミトロフ風のドグマ的前提そのものを、根底的にくつがえした。階級の統一を共産主義前衛党が「代行」しうるという考えが告発され、「一枚岩主義」に対して「多元主義」が対置された。

革命後のドイツでは、一九四五―四六年のドイツ共産党(KPD)と社会民主党(SPD)の統一交渉によるSEDの誕生は、ドイツ東部反ファシズム勢力の「統一へのやみがたい圧力」によるものであったのか、それともソ連占領権力やKPDによる「強制的統合」であったのか、と問題が提起された。⁽¹⁴⁾それが「プロレタリア独裁」や「民主集中制」を強制した「全体主義化」——今日のソ連邦・東欧で最もポピュラーな「現存した社会主義」の特徴づけ——の出発点であったとすれば、コミンテルン第七回大会は、「KPDによるSPD乗っ取り」の悲劇的起点として、再把握される。もちろん、たとえば一九八九年六月三〇日付ソ連邦共産党機関紙『プラウダ』のムシャメジャンフとシャヴァヴォフのインタビュのように、「第七回大会で、

統一戦線戦術は、あらゆる種類のセクト主義の重なりや計算から解放された。いまやそれは、同権的パートナー間の自由意思にもとづく同盟となった。……それは、多元主義を基礎にした統一であり、一枚岩主義にもとづくものではなかった」と、コミンテルン第七回大会を「多元主義の起点」として礼賛する評価も、なお存在する。⁽¹⁵⁾

しかし、東欧革命後の統一ドイツの旧ML研機関誌『労働運動史紀要(Bzg)』一九九一年二号誌上で、第七回大会後のコミンテルン執行委員会におけるフランス、スペイン、スウェーデン、オーストリア、ポーランド共産党への指導に関する書記局の新資料を紹介・解説したE・レーヴィンらは、——実はレーヴィン自身は、かつてホーネッカー体制のもとでは、ディミトロフの「労働者階級の政治的統一」論を高く評価する論陣を張っていたのだが——、別の見方を提示する。

彼らは、一九三六年二月二〇日の執行委員会書記局でのポーランド共産党問題でのディミトロフ演説を

解説して、ディミトロフが、一方で社会民主主義内部の分化を強調しながら、他方で社会民主主義政党的影響力増大を恐れている矛盾をつき、「社会民主主義党員の共産主義の立場への移行から待望される、労働者階級の統一的革命党が相対的に急速に創設されるだろう」という確固たる幻想」を指摘する。

また、ディミトロフの提案した地方組織・下部組織の機関員・党員による統一戦線の自主的・創造的適用は、上意下達の「民主主義的中央集権制」とは両立困難であったことに注目する。

さらに、フランス人民戦線政府へのフランス共産党の参加問題に関連して、ディミトロフが、「人民戦線政府」を、民衆が人民戦線綱領は「ただソヴェト権力のもとでのみ実現しうる」ことを経験し学習する過程として位置づけている問題を、指摘する。⁽¹⁶⁾

いわば、「統一戦線・人民戦線⇨共産党独裁への一階梯」説である。

第七回大会決定はどのように実行されたのか？

第二は、第七回大会決定の「実効性への懐疑」とも

よぶべきものである。

たしかに、大会での政策転換は、主要な闘争の相手を社会民主主義からファシズムへと切り換え、またファシズムに対してプロレタリア独裁ではなくブルジョア民主主義を対置した点で、意味をもった。しかし、この新政策は、コミンテルンの「世界綱領」(一九二八年)や大会・執行委員会決定にもとづいて、長く社会民主主義を「主要敵」と考え「社会ファシズム」論的思考に毒されてきた各国共産党幹部や下部共産党員たちによって、はたして本当に歓迎されたのだろうか？ 実際は、政策策定過程ばかりではなく、政策実行過程でも大きな抵抗にぶつかり、決定通りには実行されず、しばしばネグレクトされざるをえなかったのではないか、というものである。

この点は、かつてのソ連邦ML研究所の『共産主義インタナショナル——略史』などからもある程度はうかがいえたが、E・レーヴィンらは、コミンテルン第七回大会において頂点に達する「スターリン個人崇拜」や、その後のソ連邦で進行する「大粛清」との同

時代性をも視野において、その実行過程での困難を強調する。

彼らは、一九三六年にディミトロフが直面した各国共産党への指導上の困難を、その証拠と考える。先に挙げた一九三六年二月二〇日のポーランド共産党問題についての書記局会議の演説のなかで、ディミトロフは、ポーランドの統一戦線戦術実行の立ち遅れの原因として、第一に、ポーランドの党幹部も一般大衆党員も「別な風に憤らされ、何年も別な風に活動し考え、そして今転換が不可避となった」という旧来の活動への惰性があること、第二に、ポーランドのプロレタリアートの一部、農民、小ブルジョアジー、小ブルジョア知識人など統一戦線の相手となる「民主主義的階層」が「ポーランド共産党は、ポーランド民族の政党ではなく、モスクワの手先である」と考えている不信感、を挙げた。

かつてのレーヴィンなら、ここでディミトロフの「適切な問題点の指摘」とコミンテルン中央の「正しい指導」を解説したであろうが、東欧革命をくぐった一

九九一年のレーヴィンは、この事例を、これまでのソ連やDDRの通説で述べられてきた第七回大会決定の実行過程の批判的点検を迫るものと評価する⁽¹⁸⁾。

つまり、これまでの研究では、ディミトロフ、トレーズ、トリアッティらが推進したコミンテルン第七回大会への政策転換は、コミンテルン執行委員会やドイツ共産党指導部のなかの守旧的グループによって反対され妨害されたが、それを克服してついに「革新派」が多数意見となり、一九三五年夏の第七回大会で「新政策への転換」が達成されたことが強調された。

しかし実際は、ディミトロフ自身が、ナチスの面前でのライプツィヒ国会放火裁判で、「共産主義者としての私にとって、最高の法律は、共産主義インタナショナルの綱領であり、最高の裁判所は共産主義インタナショナルの統制委員会です」と大見栄を張っていたように⁽¹⁹⁾、一九三〇年代半ばのコミンテルン構成員の行動を動機づけ、下部まで浸透していた支配的心性（マントリテ）は、コミンテルン第六回大会「綱領」や「社会ファシズム」論の路線の方であった。

第七回大会決定は、この支配的心性の転換を迫るものであったのであり、それが各支部に各国共産党や末端黨員によってどのように受容されたのか、または受容され得なかったのかは、独自の論点になりうる。

たしかに、一九三〇年代前半のコミンテルンにも、「階級対階級」「社会ファシズム」の路線にそわない下部からの統一戦線の模索は存在した。しかしそれらは、「日和見主義」「右翼的偏向」として批判され抑圧された、党内少数者・異端者の抵抗であった。また、第七回大会への政策転換は、ソ連共産党とコミンテルン執行委員会幹部会および第七回大会議事日程準備委員会レベルで、暗闘を伴いつつ達成された「上からの政策転換」であり、世界各国の一般黨員にとっては、「密室」で進められた「宮廷革命」風の転換であった。各国語版のコミンテルン機関紙誌上でも、大会時まで新旧両政策の立場が主張されており、よほど注意深く読まない限り、むしろ従来の路線が支配的であった。そのうえ、大会決定そのものも、自己批判抜きで旧路線の「正しさ」が確認されたままの、いわば「なしくず

しの転換」として構成されていた。

第七回大会終了の直前、一九三五年八月一八・一九日に開かれた、ディミトロフ報告についての大会決議「ファシズムの攻勢と、ファシズムに反対し労働者階級の統一をめざす闘争における共産主義インタナショナルの任務」の最終案を仕上げる議事日程第二項準備委員会の席上でさえ、原案にはなお「資本主義体制は革命と戦争の新たな循環に入りつつある」という旧来の型の定式が残されており、ディミトロフは「これは古い定式化の継続であり、私自身は賛成できないといわざるをえない。しかし私は、大会前に、とりわけ会議場でそれを校訂してきたので、こうした定式化は避けるべきだと思ってきたのだが……」と繰り返さざるをえない雰囲気であったことが、これも、最近モスクワで発表された新資料から、明らかにされている。²⁰⁾

したがって、この新たな転換の「本当の意味」を、下部まで浸透させることがどれだけ困難であったかが、改めて問題にされる。こうした視角からは、当然に、フランス人民戦線政府へのフランス共産党の対応、ス

ペイン人民戦線での共産主義者のアナーキストへの態度や、独ソ不可侵条約によってコミンテルンの反ヒットラー宣伝がストップし、旧来のセクト的路線が復活してくる問題、第二次世界大戦勃発時の戦争の性格づけの問題などが、再検討を迫られる。

第七回大会の課題は「解散」ではなかったか？

第三は、いわば「遅すぎた政策転換」という見方である。つまり、社会民主主義者と心底から憎しみあう局面を経験し、その結果でもあるナチスの政権掌握による「労働者階級の敗北」が明らかにになってからようやく始まった政策転換の、歴史的意味にたいする疑問である。この点を、レーヴィンらは、第七回大会そのものが「歴史的には遅すぎた転換」ではなかったか、と示唆した。⁽²¹⁾

しかし、東欧市民革命後のBZG誌の若い世代による研究では、そもそもドイツ共産党のコミンテルン加入やレーニンの「加入条件二一カ条」自身が問題であり、ドイツ共産党は、一九二〇年代後半の「ポリシエヴィキ化」によって「スターリン主義化」をすでに完

成していた。⁽²²⁾二〇年代末から三〇年代初頭の「社会ファシズム」「社会民主主義主要打撃」論はその論理的帰結であったのだから、ナチズム政権掌握後のコミンテルンの最大の課題とは、自らの「解散」にほかならなかったことになる。

コミンテルンを解散して各国共産党が自国の社会民主主義政党に統一戦線を申し入れたのならともかく、部分的手直しでコミンテルン組織を一九四三年まで存続したこと自体が——かつてスプリアーノも示唆していたように——、歴史的評価の論点となる。

レーヴィン風にいえば、問題はコミンテルンの「当時の党概念 (Parteiaufassung)」そのものであり、⁽²³⁾デIMITロフの唱えた「指導と活動の方法の変更」程度ではすまされないものではなかったか、ということになる。端的にいえば、コミンテルンが存続したことによって、スターリンの「粛清」は、多くのモスクワ在住外国人に及んだ。その「人民の敵」「ドイツ・ファシストの手先」「日本帝国主義のスパイ」とされた外国人犠牲者のほとんどが、コミンテルンの活動になんらか

のかたちで関わった各国共産主義者たちであったことを、どう第七回大会評価と両立させるかである。

これはまた、従来の研究で、コミンテルン第七回大会は「戦略的転換」か「戦術的転換」に留まるかと論じられてきた問題を、伏在している。

トリアッティの問題提起とレイブゾン⁽²⁴⁾シリニヤの研究に始まり、私の旧稿やアゴステイを含む「戦略的転換」説は、第七回大会決定やデイミトロフ報告自身は「戦術的転換」情勢変化に対する適応⁽²⁵⁾しか語っていないが、そこには生まれた「転換」の内容と意味は、第六回大会の「コミンテルン綱領」やその直後からの「社会ファシズム」論とは論理的・歴史的に断絶するものであることを、強調するものであった。

この視角は、冷戦期の西側反共的研究による「反ファシズム統一戦線はスターリンのマヌーヴァー」とする説に反論し、あわせて、「脱スターリン主義」の立場から第七回大会の「新しい要素」をすくいあげる志向を含蓄しており、今日でも、ソ連のシリニヤ、フィソフ⁽²⁶⁾らには、受け継がれている。

しかしこの視角は、その反面で、第七回大会を客観的にみるうえで、の障害になるのではないかと批判的が、早くから出されていた。たとえば、西川正雄は、「今日の状況から逆算して第七回大会の新しい要素のみを強調することは、非歴史的というそしりを免れただけではなく、『転換』のはらむ問題を単純化するこ
とになりかねない」と警告していた。⁽²⁵⁾

やや異なる視点から、石川捷治は、当時のコミンテルンはなお「ソヴェト型プロレタリア独裁」戦略を放棄していないが故に「戦術的転換」に留まるものではないか、と問題を提起していた。⁽²⁶⁾

これは「戦略」という軍事用語で何を理解するかにかかわるのであるが、E・H・カーは、「コミンテルンの歴史を顧みて、第七回大会が転換点を画したことは何人も否定しないだろう。しかし、そこで宣言された政策が、それに先立つ政策の論理的な到達点であるのか、それともこの機構がこれまで誓いをたててきた諸原則からの急激な転換であるのかという問題は、それほど容易には解答できない」と慎重で、「レーニンの

『統一戦線』は、プロレタリア革命の到来を早めるために案出された。ディミトロフの『人民戦線』は、ファシズムという緊急事態に対処することを目的として、プロレタリア革命を棚上げにするために案出された。『世界革命を舞台の正面から脇に移したこと』によって、コミンテルンの地位は永久的な変化を蒙った」と巧みに表現した。⁽²⁷⁾

右の「実行されなかった転換」「遅すぎた転換」説は、コミンテルン第七回大会を「戦略的転換」と手放して評価することに、反省を迫っているとらえてよいだろう。私自身にもかつての研究の自己批判を迫るものであり、コミンテルンの政策転換を、大会決定のレベルにおいてばかりでなく、その具体的適用・執行過程を含めて、「スターリン個人崇拜」や「粛清との共存」をも視野において再評価する必要を、示唆しているのである。

なお、私の近著『コミンテルンの世界像』(仮題、青木書店刊)においては、以上の三点に加えて、第四に、当時の「スターリン個人崇拜」とコミンテルン第七回

大会の許容した「民主主義の質」の問題、第五に、「粛清」と「反ファシズム統一戦線」の関係の問題、第六に、「反ファシズム・レジスタンス」の意味の見直しの問題をも論じる予定であるが、すでに紙数は尽きたので、これらについては、著作の方を直接参照していただきたい。

(1) 代表的なものとして、J. Braumthal, *Geschichte der Internationale*, Berlin/Bonn-Bad Godesberg 1963, Bd. 2, S. 445, H. S. Watson, *From Lenin to Khrushchev*—*The History of World Communism*, New York 1960, p. 177, 及び E. H. Carr, *German Soviet Relations between the Two World Wars, 1919-1939*, Baltimore 1951 [富永幸生訳『独ソ関係史』サインル出版会、一九七二年、一三六—一三七頁] A. Stummthal, *The Tragedy of European Labor*, 1951 [神川・神谷訳『ヨーロッパ労働運動史の悲劇』岩波書店、一九五八年、一〇二頁以下] G. D. H. Cole, *Socialism and Fascism, 1931-39*, London 1960, p. 29. 斉藤孝『戦間期国際政治史』岩波書店、一九七八年、二〇九頁以下、などを参照。

- (2) B・レイブゾン/K・シリニャ(石堂清倫訳)『現代革命の理論——コミンテルンの政策転換』合同出版、一九六六年。ソ連邦共産党ML研究所(村田陽一訳)『コミンテルンの歴史』下巻、大月書店、一九七三年。なお、中林賢二郎「統一戦線史論」労働運動史研究会編『統一戦線の歴史』労働旬報社、一九七三年。人民戦線史翻訳刊行委員会訳『フランス人民戦線史』新日本出版社、一九七一年。J・エレンスタイン他(杉江・安藤訳)『フランス現代史』上巻、青木書店、一九七四年、をも参照。
- (3) E・H・カー(内田健二訳)『コミンテルンの黄昏——一九三〇—三五年』岩波書店、一九八六年(原書一九八二年)。同(富田武訳)『コミンテルンとスペイン内戦』岩波書店、一九八五年(原書一九八四年)。なお、浜内謙「E・H・カー氏のソヴェエト・ロシア史研究について」カー(塩川伸明訳)『ロシア革命——レーニンからスターリンへ』一九一七—一九二九年』岩波現代選書、一九七九年、所収、参照。
- (4) 内田健二「訳者あとがき」前掲『コミンテルンの黄昏』四一九—四三二頁。なお、そこに付された四二二点の「参考文献」リストが、内田の整理のベースとなっており、本稿でも前提されているので、以下にそのまま再録する。
- ① E・H・カー(塩川伸明訳)『ロシア革命』岩波書店、一九七九年。
- ② E・H・カー(鈴木博信訳)『ナポレオンからスターリンへ』岩波書店、一九八四年。
- ③ E・H・カー(富田武訳)『コミンテルンとスペイン内戦』岩波書店、一九八五年。
- ④ A・ウラム(鈴木博信訳)『膨張と共存——ソヴェエト外交史I』サイマル出版、一九七八年。
- ⑤ R・C・Tucker, 'The Emergence of Stalin's Foreign Policy, in, *Slavic Review*, Vol. 36, No. 4, Winter 1977.
- ⑥ I. Hochman, *The Soviet Union and the Failure of Collective Security, 1934-1938*, Cornell U. P. 1984.
- ⑦ J. Haslam, *Soviet Foreign Policy, 1930-33: The Impact of the Depression*, Macmillan, 1983.
- ⑧ J. Haslam, *The Soviet Union and the Struggle for Collective Security in Europe, 1933-39*, Macmillan, 1984.
- ⑨ 横手慎二「ソ連外交の『転換』一九三〇—一九三五」浜内謙・荒田洋編『スターリン時代の国家と社会』木鐸社、一九八四年。
- ⑩ 平井友義「一九三三年独ソ関係の一考察——ソヴェエト外交研究序説——」『法学志林』五六巻三号、一九

五九年。

⑪ 平井友義「ソ連外交と東欧ロカルノをめぐる歴史的覚悟」、『法学志林』五八巻三・四号、一九六一年。

⑫ 平井友義「一九三五年・仏ソ同盟条約の成立をめぐる一考察」、『国際法外交雑誌』七〇巻二号、一九七一年。

⑬ 尾上正男『ソビエト外交史』有信堂、一九五九年。

⑭ 植田隆子「東方ロカルノ案をめぐるソ連外交——ソ連外交における『集団安全保障』政策の形成——」、『スラン研究』二二号、一九七八年。

⑮ E・H・カー(富永幸生訳)『独ソ関係史』サイマル出版、一九七二年。

⑯ J. Brauntal, *History of the International, 1914-1943*, Nelson, 1967.

⑰ F. Borkenau, *World Communism: A History of the Communist International*, Ann Arbor Paper-back, 1962〔原著は一九三九年出版、佐野健治・鈴木隆訳『世界共産党史』合同出版、一九六八年〕。

⑱ J. Haslam, *The Comintern and the Origins of the Popular Front 1934-1935*, in, *The Historical Journal*, Vol. 22, no. 3 (1979).

⑲ E. H. Carr, *Foundations of a Planned Economy, 1926-1929*, Vol. 3, Macmillan, 1976, Ch. 66.

⑳ 山極潔『ロミンテルンと人民戦線』青木書店、一九八一年。

㉑ 平瀬徹也『フランス人民戦線』近藤出版、一九七四年。

㉒ Cécile and Albert Vassart, *The Moscow Origin of the French "Popular Front"*, in, M. M. Drachkovitch and B. Lazitch eds, *The Comintern: Historical Highlights*, Stanford U. P. 1969.

㉓ F. Borkenau, *European Communism*, Faber & Faber Ltd, 1953.

㉔ ソ連邦共産党中央委員会付属マルクスレーニン主義研究所(村田陽一訳)『ロミンテルンの歴史』下巻、大月書店、一九七三年。

㉕ 南塚信吾「ロミンテルンにおける人民戦線政策への転換過程——ソビエト側文献による解明——」、『東史研究』三号、一九八〇年。

㉖ 中木康夫『フランス政治史』中、未来社、一九七五年。

㉗ 富永幸生・鹿毛達雄・下村由一・西川正雄『ファシズムとロミンテルン』東大出版会、一九七八年。

㉘ 加藤哲郎「世界政党と政策転換(一九三四—三五年)——ロミンテルンの政治学的予備考察」、『名古屋大学』『法政論集』七八・七九号、一九七九年。

- ⑲ 『岩波・西洋人名辞典、増補版』岩波書店、一九八一年。
- ⑳ M・ドラチコヴィッチ、B・ラジッチ(勝部元・飛田勘次訳)『コミンテルン人名事典』至誠堂、一九八〇年。
- ㉑ デイミトロフ選集編集委員会編訳『デイミトロフ選集』全三巻、大月書店、一九七二年。
- ㉒ デイミトロフ(坂井信義・村田陽一訳)『反ファシズム統一戦線』、大月書店、一九六七年。
- ㉓ デイミトロフ(田島昌夫訳)『獄中からの手紙』大月書店、一九五五年。
- ㉔ トリアッティ選集刊行委員会編訳『トリアッティ選集』全四巻、合同出版、一九六六年。
- ㉕ トリアッティ選集刊行委員会編訳『〔新版〕トリアッティ選集』全三巻、合同出版、一九八〇年。
- ㉖ トリアッティ(石堂清倫・藤沢道郎訳)『コミンテルン史論』青木書店、一九六一年、山崎功訳『統一戦線の諸問題』大月書店、一九七五年。
- ㉗ トレーズ(坂井信義訳)『フランス人民戦線』大月書店、一九七六年。
- ㉘ ビーク(阪東宏訳)『統一戦線への歴史的転換』大月書店、一九七六年。
- ㉙ 『トロツキー選集』全一二巻、現代思潮社、一九六一年。
- ① 一九六五年。
- ② 『トロツキー著作集』(現在、一三巻まで刊行中)、拓植書房。
- ③ 村田陽一編訳『コミンテルン資料集』全六巻、大月書店。
- ④ 日本国際問題研究所中国部会編『中国共産党史資料集』全一二巻、勁草書房。
- ⑤ 加藤『世界政党と政策転換』(一)、名古屋大学『法政論集』七八号、一九七九年、七六・八四頁。
- ⑥ 内田のリストに入っていない文献として、E. Lerenze, *Die Analyse des Faschismus durch die KI*, Berlin 1975. M. Hajek, *Storia dell'Internationale Comunista (1921-1935)*, Roma 1972. F. Claudin, *The Communist Movement — From Comintern to Cominform*, Penguin Books 1975. G. ホッフア(坂井・大久保訳)『ソ連邦史』第二巻、一九八〇年。A・アゴステイ(石堂清倫訳)『コミンテルン史』現代史出版所、一九八七年。
- ⑦ F. I. Firsov, *Stalin und die Komintern*, in: IGA, *Die Komintern und Stalin*, Berlin 1990, S. 111-112. Firsov/Schirinja, *Komintern — Zeit der Puffungen* ("Prawda", Moskau, Nr. 97, 7. April 1989), *ebenda*, S. 40. トロツキーの手紙そのものは、村田

- 『第一編訳「ロマンテンン資料集」第六巻』大月書店
一九八三年 三二八—三二九頁。
- (80) Rede in der Sitzung der Kommission zur Vorbereitung des zweiten Tagesordnungspunktes des VII. Kongresses der Kommintern am 2. Juli 1934 (nach der stenographischen Aufzeichnung), in, *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung* (BzG), 33. Jg. Nr. 2, 1991, S. 215-218.
- (81) E. Lewin/L. Schewtschenko, Dimitroff-Dokumente zur Politik der KI (1934-36), *ebenda*, S. 213.
- (9) G. Dimitroff, Die Offensive des Faschismus und die Aufgaben der K. I. im Kampf für die Einheit der Arbeiterklasse gegen den Faschismus, in, *Protokoll des VII. Weltkongresses der K. I. (Ungedruckte Ausgabe)*, Stuttgart 1974, S. 375 ff. [「ドイッチェ・ソビエト・ソシアリズムの攻勢」のソビエト・ソシアリズムの統一をめぐる闘争における共産主義者の役割の統一任務」邦訳『ドイッチェ・ソビエト・ソシアリズムの統一任務』第二巻 大月書店 一九七二年 一五四—一五七頁】。
- (11) 加藤「ロマンテンン第七回大会の国家像」『マルクス主義法学講座』第二巻 日本評論社 一九七八年 二九五—二九六頁。同「世界政党と政策転換」(11) 三〇二頁以下 参照。
- (2) P. Spriano, *Stalin and the European Communists*, London 1985, pp. 29-31. トハクト「前編訳『ソビエト』」二〇—二二頁。
- (3) G. Jahn/E. Lewin, Zu den Vorstellungen der KI über die Schaffung einheitlicher revolutionärer Massenparteien der Arbeiterklasse, in, BzG, 18. Jg. Nr. 6, 1976, S. 978 ff, IML b. ZKSED, *Kommintern und revolutionäre Partei*, Berlin 1986, S. 27.
- (4) IGA, *Einheitsdrang oder Zwangsvereinigung?* — Die Sechziger-Konferenzen von KPD und SPD 1945 und 1946, Berlin 1990. 大月書店『資料集』GH・ソビエトの対話の日記題を「強制」の字で記す。基本的に労働者大衆の統一を力とする同党の自発的・民主主義的統合であった。一九四八年以後スターリン主義化したことによる。
- (5) M. Muchamedshanov/J. Chawanow, *Kommintern — Gegen Faschismus und Krieg* (“Prawda”, Moskau, Nr. 181, 30. Juni 1989), in, *Die Kommintern und Stalin*, S. 52.
- (9) E. Lewin/L. Schewtschenko, Dimitroff—Dokumente zur Politik der KI (1934-36), in, BzG, 33. Jg. Nr. 2, 1991, S. 214.

- (17) 邦訳『ロシヤの歴史』下巻、一〇五頁以下。
- (18) Lewin/Schewtschenko, *a. a. O.*, S. 212, 214, 232.
- (19) デイミトロフ「法廷における最終陳述の速記」(一九三三年一月一六日)、邦訳『デイミトロフ選集』第二巻、一八頁。
- (20) Lewin/Schewtschenko, *a. a. O.*, S. 212.
- (21) Lewin/Schewtschenko, *a. a. O.*, S. 214.
- (22) Y. Thron, *Bolschewisierung gleich Stalinisierung?*, BzG, 32. Jg. Nr. 5, 1990.
- (23) Lewin/Schewtschenko, *a. a. O.*, S. 212.
- (24) トリアッティ「共産主義インタナショナルの歴史にかんするいくつかの問題」(石堂・藤沢訳)『コミンテルン史論』青木文庫、一九六一年、一五八頁。レイブゾン・シリニャ、前掲書、二二、二一九、三六一—三六二頁。影山日出弥「国家イデオロギー論」青木書店、一九七三年、三〇四頁。加藤前掲「コミンテルン第七回大会の国家像」二八七頁。アゴステイ、前掲書、七四二頁。Firsov/Schirnjia, *a. a. O.*, S. 41. なお、栗木安延「近代社会運動史序説——コミンテルン綱領論争」『専修経済学論集』二二巻二・三号(一九八七年)は、いわば一巡遅れの「戦略的転換」説である。
- (25) 西川正雄「ファシズムと民主主義」富永ほか前掲『ファシズムとコミンテルン』二九一頁。
- (26) 石川捷治「コミンテルンの転換——第七回大会論ノート」九州大学『法政研究』第五一卷三号、一九八五年、五一—六頁。
- (27) カー『コミンテルンの黄昏』三九二—三九五頁。
- (付記) 小論は、近く公刊する予定の拙著『コミンテルンの世界像』(仮題、青木書店)の第二部「コミンテルンの政策転換(一九三四—三五年)」第一章「政策転換」の草稿の一部をもとに、本特集「情報と社会変容」の趣旨に合わせてアレンジした、独立論文である。
- もともとここには、一九九一年六月一六日の小平祭で行われた「一橋論叢ワークショップ」での私の講演記録「東欧市民革命と情報ネットワークワーキング」を、当日の質疑応答をふまえて新たに論文を執筆し収録すべきなのであるが、①現在の私の研究が著書の方に集中しており、そのテーマと直接関係しない講演記録を改めて執筆できる状況にないこと、②講演内容そのものは、参考文献に掲げた私の既刊著書である程度は述べられているものであること、③原稿締切まで講演後三週間しか時間的余裕がなく、しかも私は締切以前に海外研修に出発しなければならぬ事情があったこと、などの理由により、講演記録は断念せざるをえなかった。しかし、他のワークショップ講演者との関係で

原稿を出さないわけにはいかないとのことなので、当日の講演とは直接関係しないが、「東欧市民革命と情報」の部分である程度重なり合う小論を寄稿することで、その責めを果たすことにした。

以下に、当日配布した講演レジメの中核部分をかかげて記録に代えらるとともに、当日の参加者ならびに主催者におわびしたい。

東欧市民革命と情報ネットワーク（講演レジメ）

- 1 世界を変えた一九八九年東欧市民革命
- 2 東欧市民革命と情報の役割 II 「テレビ時代のフォーラム型革命」「情報化革命」
- ① 一九八九年後半の「平和的・連鎖的・加速的市民革命」「一枚岩主義から多元主義へ」
- ② 「国家主義的社会主义主義 II 国有化中心指令型計画経済十共産党一党独裁」の崩壊
- ③ 「フォーラム・円卓会議型の市民革命」 II 共産党独裁への市民的抵抗・蜂起・民主化
- ④ 「自由選挙」と「市場導入」 II 「フォーラム」の分化・政党化
- ⑤ 「革命」とはなんであったのか？ II 民衆の「公共的コミュニケーション」回復過程
- ⑥ 「市民社会の復権」 II 生活世界の地下水脈の噴出、フランス革命と東欧革命

3 それぞれの革命における情報とフォーラム

① 中国「反革命」——世界が見た「血の日曜日」とブライインド・ファクシング

② ポーランド——「連帯」の「自制的革命」と教会が協力したビデオ・ネットワーク

③ ハンガリー——共産党 II 国内改革派による「上からの革命」と国营テレビの変貌

④ 東独——「新フォーラム」の「人民革命」から西独主導の「民族統一 II 併合」へ

⑤ チェコスロヴァキア——「市民フォーラム」による「ピロドの革命」と情報回路

⑥ ルーマニア——「自由ルーマニア放送」を拠点とした「反チャウシェスク革命」

⑦ ソ連——「ベレストロイカ」を加速させた「グラーズノスチ」とチェルノブイリ報道

4 「国家主義的社会主义主義」の情報支配と矛盾

① J・オーウェル『一九八四年』とR・レーガンの情報観——二〇世紀政治支配の矛盾

② 「一枚岩主義」 II 政治・経済・社会・文化の一元制国家による一元的統制志向

③ マルクス・レーニン主義教育と情報手段独占によるイデオロギー統制

④ 「統制」維持のための情報操作 II 情報ハイライキ

1、テレビの普及、妨害電波

⑤その矛盾⇨経済計算の困難と非効率、情報手段の抵抗手段化、自由の内面的発展性

⑥民衆情報の結節点としての「フォーラム（討論の広場）」とそのネットワーキング

⑦多元主義⇨軍隊型「鉄の規律」「民主集中制」に対する情報民主主義の原理

⑧東欧「フォーラム・円卓会議」型運動と西欧「新しい社会運動」の共通性

⑨情報化時代の国家・企業・民衆⇨地球的規模での情報戦争のもとでの民衆的コミュニケーションとパソコン通信ネットワークワーキング

(参考文献)

NHK取材班『かくして革命は国境を越えた』日本放送出版協会、一九九〇年

NHKスペシャル『社会主義の二〇世紀』全六巻、日本放送出版協会、一九九〇—一九九二年

ダン・チョバヌ『この目でみた政権の崩壊』日本放送出版協会、一九九〇年

伊藤千尋『歴史は急ぐ』朝日新聞社、一九九〇年

加藤哲郎『社会主義と組織原理 I』窓社、一九八九年

加藤哲郎『東欧革命と社会主義』花伝社、一九九〇年

加藤哲郎『社会主義の危機と民主主義の再生』教育史料出版会、一九九〇年

(一橋大学教授)

文化評論

特集＝大学自治の新しい展望

1969

3

NO.90

マルクス文学・芸術論

ソ連M・E・L研究所編 M・E選集刊行会訳
菊判・8P2段組・クロス美装・定価二〇〇〇円

文学・芸術論

マルクスIIエンゲルス著 M.L研究所訳
国民文庫版 定価一三〇〇円

マルクス夫人の生涯

ウイノグラドスカア著 嶺高志訳 定価六五〇円

マルクスの娘たち

ウオロビョワ、シネリニコワ著 岩上淑子訳 定価六五〇円

日本の児童文学

①総論 菅 忠道著 四六判定価一三〇〇円

児童文化の現代史

菅 忠道著 四六判・美装 定価七〇〇円

ソヴェト文学論

アラゴン著 定価五八〇円

マルクス主義と現代イデオロギ

上田耕一郎・不破哲三著 定価三八〇円

マルクス主義と平和運動

上田耕一郎著 定価五五〇円

マルクス主義と現代修正主義

不破哲三著 定価五五〇円

マルクス主義研究

五〇〇円

おける芸術に

一〇〇円

キーおよびゴーストエフス

一〇〇円

党と文化問題

八〇円

共産党宣言 九〇円

空想から科学へ 二〇〇円

猿が人間になるについての労働の役割 一八〇円

反デューリング論 二四〇〇円

フォイエエルバッハ論 九〇円

自然弁証法 二一五〇円

家族・私有財産・国家の起源 一七〇円

哲学の貧困 二〇〇円

資本論 全11冊 二四二〇円

マルクスIIエンゲルス主義 二一五〇円

帝国主義論 二二〇円

国家と革命 二二〇円

唯物論と経験批判論 二一六〇円

「左翼」小児病 一一〇円

カール・マルクス 一六〇円

青年論 一五〇円

婦人論 一〇〇円

再編の突破口とすることをもっぱらねらっている。

わが党は、政府、自民党のこのような策謀に断固反対するものである」

日本共産党は、さきあげた「主張」のなかで、政府、自民党の大学への干渉・介入に反対し、学問の自由と大学の自治を守ることの重要な意義を強調している。そして、「今日の深刻な大学問題を解決する道は、学生と教職員が、大学の管理運営の民主化を実現し、大学の自治と民主主義をまもり、教育、研究の自主的、民主的発展のために共同してたたかう以外にない」ことを明らかにし、学生、大学院生、教職員が、政府、自民党の大学の自治破壊と闘い、トロツキストの策動を排除し、大学ごとの団結をかためるとともに、全国的な統一をもつよめ、さらに、労働者階級を中心とする広範な民主勢力の一翼としてともにたたかうことが、大学問題解決の真の力になることを強調している。

共産党のこの「主張」の正しさは、いま、トロツキストの破壊活動のいっそうの激化と、政府、自民党のろこつな介入という新事態のなかで、ますますあきらかになってきている。

矛盾が拡大し、事態が複雑化するにつれて、大学問題にたいする、その他の諸政党の政策の正非も、いっそう明白に検証されることになるであろう。

(よしわら じろう・評論家)

口絵のごとく

「三四郎池」

横堀角次郎

この池は漱石の小説の中に出てくるので「三四郎池」とよばれるようになった。この庭はもと、加賀百万石の庭園で、赤門と共に、東京の名所であり、学生のいこいの場ともなっている。

この画面の中央の、時計台のある建物が安田講堂である。私は岸田さん(劉生)と共に遇した鶴沼から本郷に移り住んだのは、小杉放庵先生が、この講堂の壁面「採葉、採果」の絵を描かれるので助手に選ばれたからである。もう五十年前からこの周辺の風景を描いて居る。私が春陽会会員になった時の作品もこのほとりの風景だった。戦後再びここを遊作して、例年、春浅い三月始めから、水温がこの池畔で仕事が始まる。桜が咲き初め、そして散り、若芽が燃える頃、漸く完成に近づく。約二ヵ月、展覧会ぎりぎりに筆をおく。ここは静かであることがよい。東京にもこんな静かなところが有るのかと初めて来た人は言う。私に用のある人はよくここへ訪ねてくれる。昨春は学生のデモの声を聞きながら仕事をした。

この絵は昨秋東京都主催の「芸術に現われた東京百年展」に出品したものである。

(撮影・本間鉄雄)



座談会

現代学生の意識と行動

—東大闘争の新たな展開のなかで—

1月10日、秩父宮ラグビー場での東大七学部集会寸景

「ノン・ポリ」とは
「ノン・セクト」とは

編集部 東大闘争をはじめとするこんどの
大学民主化闘争のたかまりの過程で、これま
では自治会にも積極的に結果してこなかった
り、あるいはほとんど無関心に近い状態であ
った学生が、じつにさまざまなかたちで闘争
に参加しています。一般の新聞では「一般学

生」「中間派」「ノン・セクト」「ノン・ポ
リ」などといわれているわけですが、きょう
はこういう学生たちが大学の自治ということ
について何を感じ、何を考えてきたのかとい
うことを中心に話し合っていたのだと思
います。

江口 「ノン・ポリ」とか「ノン・セクト」
とか申しますけれども、学生を「三派系」と
か「民青系」とかいうふうに機械的にわけて

出席者

江 口 朴 郎

—東京大学教授

—東京教育大学助教授

藤 静 夫

—私立大学助教授(匿名)

野 淳

—東京大学 (匿名)

島 一 夫

—東京大学学生(匿名)

本 衛

—東京大学学生(匿名)

田 欽 也

司会||編集部

考えること自身にすでに問題があると思うの
ですが、「ノン・ポリ」とか「ノン・セクト」
とかいわれている存在についてはいっそう多
機性と発露性をもつものとして考えなければ
ならないと思います。

山本 「ノン・ポリ」と「ノン・セクト」
とはいままでは同じではなくなってきたら
ですよね。東大闘争のはじめのころは「自分
はノン・ポリである」ということにたいし

「勇義」人間というものはポリティカルなものであって、主観的にノン・ポリであると思っている、なんらかのかたちで政治的な立場に共鳴せざるをえないし、また共鳴しないということもひとつの政治的な立場になる、ということが、機動隊の導入と医学部問題の

ことからいわば考えなおさせられてきた。最近ではもうほとんど「ノン・ポリ」といふことはきかれませんが、今日の状況ではなんらかの立場というものを主観的に表明せざるをえない、また表明しなければ自分の勉学を受ける権利とか、卒業する権利とか、大学における学生の基本的権利が現実には奪われてゆく。それではどういふ運動をすすめるかというところが、「ノン・ポリ」といわれてきた人たちの問題になってくるわけです。そのさいに、

ひっかかるのが「マス・コミ」などでいわれている「日共系」と「反日共系」の対立という形で出されてきた、「セクト」と「一般学生」というわけがたなんですね。東大闘争のばあい、「ノン・セクト」といわれる部分が運動の前面に出てきたのは、十一月の図書館封鎖——「全学共闘会議」が「全学バリケード封鎖」ということをいいはじめたとき——ですが、「日共系」や「全共闘系」などのレ

ッテルをはりつけられないで主体的に行動できるといふことで、相対的に自立した運動を組んでいったわけです。

編集部 六〇年安保闘争のころにも、トロツキストの影響は学生運動のなかにかなりありましたが、「ノン・セクト」を標榜して行動した学生はなかったですね。

湯島 そうですね。いまの東大闘争も、安保闘争の場合とはだいぶふんちが違ってきます。動かない学生というのはある意味では一人もいないので、その動きかたが「ノン・セクト」的、「ノン・ポリ」的の学生であるといふだけだとおもいます。根元から学生が揺さぶられたという意味では、「ノン・セクト」や一般学生を利用しようという勢力がありますから、マイナス面もあるんですけども、総合してみれば学生層の意識の深化がプラスをひいているといえますね。

佐藤 「ノン・ポリ」とか「ノン・セクト」とか昨年からいわれてきたこと自体が、一面では学生の大多数がたちあがったことを示していると思いますが、反面それをことさらに外から固定化して説明している面もありますね。

湯島 安保のときに「市民主義」というの

がありましたですね。「市民主義」というのは、いまわれわれが使うことばでいえば、「ノン・ポリ」「ノン・セクト」なわけですよ。しかし東大闘争の場合では、安保当時からいわれ、今も一部の政治学者のもちあがる「市民主義」が、有効にはたらいいたとはいえない。二つの大集会の衝突を「マス・コミ」

がおもしろそうに予想した十一月二十二日のときに、非暴力活動ということで一時的に「ライト」をあげたようなかたむきはありますけれども、理論的に「市民主義」をバック・アップするような議論があつて、「ノン・ポリ」とか「ノン・セクト」がもてはやされたというような気配はない。「ノン・ポリ」とか「ノン・セクト」が安保後に、「市民主義」の立場が、統一戦線とは別な有効性をもつかのようにはやされたことは、だいぶ様相ががらついていると思います。

学生の意識のひとつの形

吉野 現代の学生の意識ということの問題にする場合に、さいきん知った例があります。ある大学で去年の秋から春にかけて、ちょっとした問題があつたんですが、それに関連して一年生のあるクラスがクラス決議を

出したんです。その決議というのは三つあって、ひとつは文化祭の実行委員会が出した文化祭の方針書がけしからんという決議なんです。どかがけしからんかという、文化の問題で現在の日本文化のありかたはアメリカ文化の影響を受けて、非常に退廃的植民地的になっていると書いてあるが、これはひじょうに一方的な意見であって、アメリカ文化は退廃的であり、社会主義文化がそのまま正しいかのような、ひじょうに偏見にみちた意見であってけしからんという決議なんです。第二の決議は、この学園の高校を大学の方にもつてしようという決定を、学生にはかることなしに理事会・教授会がきめたのはけしからんという、つまり大学参加の要求ですね。第三の声明は去年の夏に全学連大会が開かれたとき、その自治会は加盟してないのだそうですが、オプザバーを派遣した、それがけしからんというんですね。つまり、いまの学生運動にはいくつかのセクトがあり、これはその一方に加担しようとするものであってけしからんというわけです。

この三つのクラス決議の話を聞いて、「はあ」と思ったのですが、第一の決議は、ひじょうに素朴な、まさに「ノン・ポリ」の意

見ですね。アメリカ文化が退廃しているという自身かたよっているといういいかたは、いわば政治的問題に目を向けるまで、ジャーナリズムや文部省の教育によって自然に持たされているごく常識的な意見でしょう。それは一方では全学連うんぬんはけしからんということとも結びつく。ところがそのなかの学生参加の要求というのは、これはたとえ十年前の安保闘争のところ、あるいはわれわれが学生だったころの五〇年代だと、学長選挙、総長選挙に学生の選挙権を要求することでも、宣伝のスローガンではありえても、実際にクラス決議をするなんて、思いもよらなかつた。ところが、それが出ている。そのへんがいまの学生の状況を、ひじょうに集中的にものごとがたっているような気がしたんですね。

だから安保のころにはなかつた「ノン・ポリ」とか「ノン・セクト」とかがいま出てくるというのは、安保のころには、ある意味でポリティカルな関心をもっている部分しか動かなかつたのが、いまは学生の権利とか、学生の自己主張という点でノン・ポリティカルな層も含めて、ほとんど全学生の問題になつていて、ということだと思ふんです。

ね。その状況が大きく変わっている。全学連の運動にしても、六〇年安保のときに、トロッキストが指導部を握っていて、その後壊滅状態になつたのが再建された。つまりそれはかなりの政治的関心をもっている層のなかに、民権なり全学連の方針が、基本的には正しいこととして認められてきた過程だつた。ところが、そこから運動が学生の権利、主張というところで、もうひとまわり大きくなつた時期になると、素朴な政治不信だとか、あるいは政党不信、これはトロッキストのいう既成革新勢力への不信というようなものよりも、さらにもつと以前の次元のものが、大きく作用しているように思ふのです。われわれが政治的関心をもちはじめた初期でも、政府は悪いが、どうも社会党にも満足できないし共産党にもちよつとついていけないというような感じをもつ時期というのは、やはりあつたと思ふんですね。われわれのところには、その意識がつつめられ、いったんどこかで否定されなければ政治活動に参加できなかったし、政治的な自己主張がでなかつた問題状況であつたのが、いまはトロッキズムがあり、修正主義があり、何々がありという状況のなかに、共産主義とかマルクス主義とかにたいす

る偏見を、いわば、一度もそこで否定しない
で、すうと運動を始める。それがその
まま残つてくる、という状況があると思うん
です。

だから、そういう状況をうみ出し、しかも
その状況から学生諸君をさらにもう一歩前進
させなくして重要な障害のひとつに、
トロツキズムその他があるということは明ら
かだし、重要な問題であると思うんですけれ
ども、基本的には、学生諸君がその意識では
案外な、ごくあたりまえの学生の意識から出
発しているからこそ、「ノン・ポリ」「ノン
・セクト」あるいはそこからちよつと踏み
出しかけた学生諸君が、「全共闘」などに影
響を受けやすくなっているのだというところ
をみないと、いまの学生諸君の意識のプラ
面とマイナスを正しく理解するのに失敗す
るんじゃないかと思うんです。

佐藤 いまは「ノン・ポリ」というような
ものはなくなりつつあるし、そういう立場自
体が東大の場合はいえないうちのお話によ
くわかります。そこで話はちよつとちがうか
もしれませんが、現代の大学生の意識とい
うことを考える場合に、高校教育の現状とい
うことも考えなければならぬ。就職志望者と

受験志望者とを区別し、受験志望の方も志望
校別にあつかつて、〇×式の受験一本でやっ
てきた。いわば環境としても「ノン・ポリ」
でなくてははいれないという受験の実状との
関係もあった。それで、やれ大学生になつた
というときに、自分の教育環境なりあるいは
研究環境というものを自分の目で見て、はた
して考えていたものであるかという、かな
り落胆するようなところも多いと思います。
しかし中学校から高等学校を通じてのいまの
教育環境のなかで、自分たちの力でこれをど
ういうふう具体的に解決するかということ
で、ほとんど具体的な方向を考へるような環
境をもっていなかつた。その問題も考へな
ければならないと思います。ですから、いま
の大学生を「ノン・ポリ」だ、「ノン・セク
ト」だといつてせめても、高校なり中学校の
教育までふくめて考へなければならぬと思
います。

はじめは「ノン・ポリ」だったか……

司会 宮田さんがご存知の友だちなどは大
学にたいしてどういふことを考へていたのか
話してただけませんか。

宮田 ぼく自身、はじめはほとんど全くの

「ノン・ポリ」で、六月二十一日の最初のス
トに賛成したときには、やはり医学部処分が
人道的にみて、ちよつとひどすぎるんじゃない
かということ、それからもうひとつは大学
のなかに機動隊を一方的にいれて、学生の自
治、あるいは大学の自治を破壊したというこ
と、そういうことにたいする抗議の行動とし
て賛成したんです。ぼくの学科なんかは保守
的な部分が大きいんですけれども、その点で
はみんな一致していたと思うんです。その後
どう変わっていったかという、ぼく自身の
場合は大学において学生の権利というものが
まったく無視されているのはけしからんとい
うことについて、最初は問題を学内だけに限
って考へていた。そういう学生がひじょうに
多かつたといえます。もつとも、そのような
学生の中には、自分が講義を受けることによ
つてもたらされる価値の方が、大学改革の価
値よりも大きいとしてストライキ闘争に反対
の人もかなりいました。ところがぼく自身の
場合は渡辺洋三先生の話を書く機会があつた
り、友だちと話しあつたりもして、この闘争
というものを階級闘争の一環としてとらえな
いかぎり、さらに発展させることもできない
し、正しく解決させることもできないという

ことに気がついて、いま東大民主化行動委員
／会を積極的に支持して行動しているわけだ
けれども、そういうふうになったのは十一月
の全学封鎖が行なわれようとしたころです。
それから、大学運営への学生参加を要求しな
い「全共闘」を支持するグループがいるわけ
で、彼らは、十把一からげにすれば、大学当
局に対し「たたかう実体」を認めるといつて
いるんです。

いま、みんながどういふ状態かというのと、
問題を学内に限って考えてしまうという傾向
が、またかなり強い。どうしてそうなるかと
いうと、こんどの闘争を社会の階級闘争の一
環としてとらえるということになれば、民青と
同じ考えかたをしないといけなくなるぞとい
うことから、「反民感情」(反民青感情)が
大きく作用して、問題を学内にとどめてしま
うんじゃないかと、ぼくは思うんです。

吉野 反民青感情っていうのはどういうこ
となんです。いまわたしがしゃべったよう
な、ごく素朴な、子どものときから植えつけ
られている反共、それがそのままきていると
いう部分が一方ではあると思うんですが、そ
れだけじゃなくて、ほかに何があるのです
か。

反民青感情の由来

山本 ひとはいまおっしゃったものだと
思うんですけども、もうひとつはこれは積
極面でもあるわけですが、六〇年以降の学生
運動が全学連を棄つ取っていたトロツキスト
たちによって崩壊させられて、そのあとさま
ざまな形で分裂して、学生運動全体が沈滞し
ていった。もちろん大学管理法反対闘争とか
個別な闘争はあったわけですけども、全
体としての学生運動を統一していくというこ
とはできなかつた時期、こういつた時期に生
まれたひとつの意識だと思えます。学生運
動というのはいわゆる活動家がやるものであ
って、自分たちはその受益者であるというふ
うな意識があつたと思うんです。ところが、そ
れがこんどの東大闘争のような大闘争、ある
いはそれ以前の早稲田の授業料値上げ反対闘
争とかになつてくると、どうしてもそこで運
動に参加していかなければならぬ。自分が
運動に参加していく場合に、一般的には自治
会民主主義が貫かれていなければならない。自
治会民主主義が貫かれていなければそこで自分
たちの学部、クラス、ゼミなどで討論をおこ
して、そこで選ばれた執行部の指導について
いけばいいというふうになると思うんですけ

れども、実際の学生運動というものはそれほ
ど、学生全体の運動としておこなわれてきた
とはいえない側面もあるわけですね。執行部
まかせの運動のなかでつちかわれてきた意識
が「平時の民青、非常時の三派」というふう
な……。 (笑い) 要求の闘争、ある意味では
ごくあたりまえな闘争をやれば「民青」であ
って、実際に大闘争になつてくると、いわゆ
る民青系の運動にどこまでついていけるか、
ひとりひとりの学生自身が試したこともな
かつた。そういう契機をあたえてくれるのはた
いたいにおいて、トロツキストの側の方が多
かつた。ほんとうはそうじゃないので、これ
はぼくたちの問題提起が少なかつたからだと
も考えられますが、大きな闘争になつてく
ると、どうしても執行部まかせということには
できなくなつてくる。自分たちも主体的にた
ちあがらなければならぬ。そのさいに、い
まままでの執行部をたいして一なんで自分たち
をいまままで呼び覚ましてくれなかつたのだ
という意識が一方にあるわけで、それが、い
わゆる「反民感情」というものにつながつて
いく側面をもっているわけです。トロツキス
トの場合は無責任に権力との挑発をくりかえ
すことによつて権力の弾圧をひき出し、その

尻ぬぐいを学生全体におしつけ、学生に責任を転化してゆく。そこで学生も考えこまざるをえない。ひじょうにまちがった方向ですけれど、そういう現実があるわけです。こういう大闘争になると、執行部不信というものがそのまま「反民感情」に移っていくということが東大の場合とくに工学部なんかには出ていますね。

客観的条件と意識の落差

佐藤 具体的な方針が、そればかりで自分自身で、なるほど、と納得できない面があると、なにか外から押しつけられて、こう助け、ああ助け、というかたちで受けとってしまいがちだ。自分がほんとうに心からそう思えば、クラスなりゼミナールなり、あるいは自治会のなかで確信をもってやれるということに自然になりますけれども、具体的な大学民主化、あるいは大学の自治を守り、発展させていくというのが、学内でどこまで可能かということについての意識はまだ十分ではないんじゃないかという気がする。

宮田君がいわれたように、研究・教育条件の改善、あるいは大学の民主化ということも階級闘争の一環としてとらえないかぎり真の解

決はないんだというふうに理解しはじめた人は、大学民主化の勢力として先進的な動きをしますと思えますけれども、大学全体の自治を、具体的な手続きでもってこう守り、こう発展させていけるのだという確信と方向が、まだ必ずしも十分にもてない学生が比較的多いのじゃなからうか。その落差みたいなものがなんかこう引きずりまわされているという感じにつながっていく。

江口 いまの佐藤さんの話にあるように、具体的に矛盾が強くてひどい段階に達しているところでは、その明白な問題についての関心が強まると、どうしてもそういう落差が生じるんじゃないかと思えますね。東大で問題のはじまった医学部がそうじゃないかと思えますし、新聞、雑誌等で伝えられるところによっても、日大なども一つの典型的な例だろうと思えます。そのように問題がこれまでつもりつもっているところで急激に出てくると、どうしてもそういうことになるかもしれないですね。

湯島 その反民育の感情についてはすけれども、ちょっと論争になるかもしれないせんが、東大に限った問題でいえば、「全共闘」に反対する部分に、方針の立ちおくれがあっ

たという事実を卒直に認めなければならぬのではないか。方針の立ちおくれは、もっと掘りさげていくと、学生というものがこれほど政治的になりうるものか、ならないと思っていたんじゃないかと思われるふしがある。やっいてみると、驚くほど学生が敏感に、しかも益的にぶ厚く政治的になるといって現実には、指導部がたちおくれた。端的にいって青医連問題——医学部改革がそれです。

「三派」の諸君が先に手をうっていた。その時点では明らかに全学の「ノン・ポリ」といわれている諸君を彼らが引きずっていった様相ははつきりしていると思えます。工学部のような、いままでひとつも動かないとされてきたところの大きな部分が、つい先ごろまで医学部・文学部について時計台を支持していた。この現実には外側からみるとひじょうにわからないようにみえるかもしれないせんが、わたしたちからみれば逆によくわかるので、封建的な矛盾とか、あるいは近代管理の矛盾などがうっ積している、つまり矛盾のいちはん激しいところで、学生は逆にひじょうに政治的になりやすい。そのときに指導部が方針をもっていないかばんで問題にならない。大衆が見捨てるという事態です。こういう

ことがわたしの記憶では東大については少なくとも二回あった。一度は昨年の一月から三月にかけての医学部の闘争のときですね、まだ紛争が医学部にとどまっていた局面。これがにわかにな全学的になったときに、まず民青がおくれをとった。これははつきりしているんですね。もうひとつは機動隊導入の直後、六月二十日ごろですね。つまり各学部で指導部を握っていた勢力がばたばたとくずれていった。この時点では、指導部に明らかには大衆の政治的力量はいくつかの過小評価があり、過小評価された大衆の方は、バカにしている、

と思つて「全共闘」の方を支持するという困難関係があつたのではないか。相対的にはたから、さういふ安保の承諾が出まされたけれども、十年前とは比較にならないほどスピードイかつた的に立ち上がる可能性を一般学生がもちはじめ、それを指導しきれない。医学部改革を支持し、機動隊導入に反対する学生一般の感性が指導部につかみきれない。そこに反民青感情のゆえんがあるところがあるが逆説的だが、根本じゃないでしょうか。

宮田 ぼくもまったく同感です。いま「工スト実」（工学部ストライキ実行委員会）を支持している連中にいろいろきくんですけれ

ども、そのなかのある部分というのは、今まで民青が主導権を握っていたら、この運動というものは起こってこなかったんじゃないか、自分らは六・一七の機動隊導入によつてやつと目をさまされたんだ、だから民青を支持するわけにはいかない、と、そういう人がかなりいるわけです。

それから、もうひとついま「スト実」が勢力をひじょうに伸ばしているという理由のひとつには、産学協同という問題をとりあげた。それともうひとつは技術者問題として日常性打破とかいって、まちがった方向ですけれども、ある程度の行動提議をした。そういうことによつて、自分たちがどう行動すべきかということまで迷つていいた連中というものを、かなり引きつけたと思うんですね。それともうひとつ、「反民青」の普遍的なものとして東大生のエリート意識というものがかなり作用しているんですね。だからさういったものの総合としていまの工学部の「スト実」の勢力というものがあつたと思うんです。

学生の一般的な意識をどう評価するか

山本 運動を進めてきた側の問題としていえば、学生のいわゆる小ブルジョア意識について、ぼくらがどのように評価するかという問題がありますね。それはだめなんだ、だめなんだといつても、学生の意識そのものはけつして変わるのではなくて、具体的な行動のなかで、それぞれ矛盾にぶつかるなかで克服していくんだと思うんです。具体的にいえば六月十七日に機動隊が導入されたさいも、学生の全体の目は大学当局に向かつているわけです。大学当局が機動隊を入れたんだ、だから大学当局が悪いんだ、そしてトロツキストの「教授会＝敵論」に向かつていった。

その場合ぼくたちは、さうじゃないんだ、大学の社会的な位置というのは大学を平和と民主主義の岩として国家権力と対峙していかなければならぬ、機動隊導入による大学の自治破壊とはさういうものだ、だからその対峙には教官とも統一戦線を組んでいかなければならない、教官を敵とみるのは誤りなんだという形で反論していったわけです。さうすると、理論的にはそれで正しいわけですから、学生の意識としてはそこがしっくりいかないわけですね。実際に六月十七日に機動隊がはいった場合に、やはり、自分たちの目は

ぐうっと教授会の方に向かった。当事者というのは大学当局だ、だから大学当局にたいして非難の目を向けなければならぬ。それなのに民青は、えらそうに國家権力とかなんとかいつているというわけです。

そのへんでやはり、ぼくたちが学生の意識、現実の意識に適合した形で方針を出さなければならぬ。正しいけれども、一般的に正しいことをのべるだけでは、やはり学生は実際には運動に立ちあがってこない。あるいは実際に運動に立ちあがったとしても、それがトロツキストの方についていくという可能性をもっている。その点で、ぼくたちが学生のエネルギーをくみあげるさいに、そういう学生の小ブルジョア性というものを消極的にだけ評価するんじゃなくて、そのなかに含まれているエネルギーを爆発させる力、あるいは若さというものを、そういうたものをぼくたちが適切につかみとって、それを正しい方向にもっていくような方針をあの時点で出せなかったんじゃないか、それがやはり、その後の運動がある程度困難にしたんではないかという感じがいろいろと思ふんです。

編集部 まるまる否定されちゃったような感じでうけとられてしまうんでしょね。

山本 そうです。だから工学部なんかの場

合でも、トロツキストは学生を労働者階級の予備軍、大学を教育工場と規定して、そのなかで自分たちは社会的な矛盾を受けており、具体的にいうならば一面的奇形的な技術者に育てられているというふうにいる。それにたいしてぼくたちの対置する議論は、いやそうじゃない、実際に学生の社会的な位置というものは相対的に労働者階級とはちがっているし、また、どういう階級にこれから育っていくかについてはさまざまな可能性がある。だから、トロツキストが科学技術労働論や教育工場論をふりまわすのは誤りなんだということを書いてきた。ところが、そういう規定にたいする否定のしかたが、いわばそれ全体を否定するというような形で、実は大学のなかにあるそういう側面、大学のもっている二つの側面の一方を否定することによって、全体を否定することになるといふような傾向があった。はっきりいって工学部などの場合なら、大学院とか研究室なんかで研究していると、トロツキストの技術労働論なんかがひじょうに直接的にはいる側面があるわけです。それを否定してしまうことによって学生の意識にみあわないような形になってしまふ。ですから

らぼくらのトロツキストにたいする否定のしかたが、トロツキストがかれらの誤った理論の対象としているもの実態、そのさまざま側面を全否定してしまうような形になうてしまったりする。

編集部 宮川さんから出た問題の経過には、「教授会自治論」の立場にたつ大学当局の問題がもう一枚噛んでいると思えますね。

「ノン・セクト」学生のピラから

湯島 ここにおもしろいピラを一枚もってきたんですけれども、これは「全学共闘会議を支持している学友に訴える、クラス連合」という東大教養学部の学生組織のだした一月上旬のものです。

「これまで全共闘を支持してきた学友諸君、また現在も支持している学生諸君、われわれのクラス連合は東大闘争勝利をめざし、ともに闘う同志としてここにわれわれの立場とごみたちへの連帯の意志を表明し、同時に東大闘争の真の勝利と正しい勝利を再度確認されるように訴える」という不思議なピラなんです。

編集部 ちょっと読んでいただけますか。
湯島 前半は「自分たちは全共闘のおかげ

「八・一〇告示の批判あたりまでは全共闘の問題提起とそのきもちはわれわれの納得できるものであったし、大いに先駆的に」やってくれてありがとうといっている。「しかしながら」とつづいて「全学バリケード封鎖戦術が直接権力と対決して、それと闘うための必要手段であり、それによって闘う部隊とそれ以外とのふりわけをおこなうということは闘争勝利の展望をきりひらくものではないといわざるをえない」。

日にちで申しますと十一月二十二日の統一行動が大きく結実したケース、あるいは十二月十三日の東大駒場の代議員大会を守ったケース、このときに流血の惨を防ぐのだといったスクラムを組んだ人は結局は（少なくとも結果として）全部、代議員大会を守ることになったのです。当日、東大教養学部にあつまつた教官も、流血の惨を防ぐんだといった方は全部代議員大会を守ることになったんです。以前はそうではなかった。十二月とか十一月以前は流血の惨をさまたげるといえば、必ず暴力を否認しつつ結果的にそれを助長するようなことになっていたんですが、十一月から十二月には逆になった。

その逆転は、このクラス連合の人たちは、君たちの思想と行動は国家権力の介入を招きよせる以外のなにものでもないことを認識したときからだ、といい、きみたちと立場が今では変わった、そしていまは民主化行動委員会といっしょにやっていくと、こう自分たちのきもちを説明しているんですね。ひじょうにナイーブで、健康だと思っんです。大衆を個頼せよとよくいいますけれども、このクラス連合の諸君は複雑ないろいろな文脈をたどりながら現在統一行動をめざしている。それは彼らからみれば時計台のいうような民衆と右翼の野合というようながんたんなことではなくて、ひじょうにナイーブな健康な感情が働いている。

いかにも国家権力の手先であるということを見視覚的にもはっきり見るようになったとき、はじめて「いままでも連帯を表明してきた諸君」「今迄おかげになってきた諸君」と手を切るということになる。「ノン・ポリ」諸君がふえてだめだという常識論、あるいは一般学生待望論とはまるで逆に、ひじょうに多くの学生が現実的に力量をもっているという事実をわれわれが確認できるように一つ一つの証拠をみるように思えます。

「ノン・セクト」学生の次の試練はそう遠くない先にもう一度やってきます。七学部団交における「確認書」の内容をひっくりかえすためのどうかつとたくらみを、今、権力は真剣に考えているでしょう。いわゆる、民営ベイス・の収拾はすてておけない、大学側は妥協しすぎたと称して、成果の全てをドンデン返してひっくりかえすたくらみをすすめているでしょう。機動隊導入とひきかえに「確認書」をみとめてやるといい、導入後に入試中止といって休校→廃校→大学院大学プランをうちだしすべてを流産させる。導入にあわせて戒厳令をひき、ファシズムの体制を想定している。その時にこそ、「ノン・セクト」学生の統一行動への意向がためされま

・田舎に帰ってしまった、か？

編集部 東大の学生のなかで、田舎に帰ってしまったもどってこないものもあるというような話をきくんですが、どういうことを考えているのでしょうか。

宮田 たえば11・22の封鎖阻止闘争において「ノン・セクト」のかかりの人たちのとる考え方が極端だけれども典型的に現われていると思うんです。つまり問題は封鎖貫徹か

反対かであり、封鎖反対ならば阻止の行動に立ち上るべきなのにそうせず、傍観者の立場に自己を置いてしまつて「非暴力」という全く無責任なことを言っている。もっとも、だからと言つて彼らのとつた行動の意義を全く認めないのではなく、封鎖を阻止してきたことと、彼らがかくも行動に立ちあがったことは大きな意味をもつと思ひますけれどもね。まあそれと同じで、いかに東大闘争を解決するかということにおいても、自分で主体的に考え、かつ行動することをせずたんにそれをセクト争いときめてしまつて、あるいはそうでないにしても、自分らではどうしようもないというあきらめのきもちをもつていゝる学生がかなり工学部の場合にはいるわけです。そういう無責任な態度というものは、闘争の意義が自分とかかわりをもつて彼らにはとらえられていないところから出て来ていると思ふんです。

山本 ぼくのみかたは少しちがうんですけどね。ひとつはそういうあきらめとか、あきたとまではいかないけれども、疲れたという感じですね。そういうことで帰郷したり、あるいは下宿にこもつている人たちもいると思ひますけれども、そういう人たちも何かと

とがある——たとえばきょう封鎖を解除するといふようなことがあるとか、あるいはこんど七学部団交が決定したとか、そういうことになると「ああそうか」ということで出てくるんですよ。これはなにかというところ、一般学生の行動が直感的、直接的で感覚的といふか、なにか具体的な目標をもつて具体的なものへ向かつていくといふさいには大きなエネルギーを発揮するんだけれども、それが長期的な闘争全体のなかでは困難な局面もあるわけですね、そういうときに、展望をぼくたちがどう与えていくかという問題と、その人たち自身がそれぞれの具体的な行動のなかでどこまで自分の視野といふものをひろげていくかという問題を提起していると思ふんです。とくに十月の全学無期限ストライキに就いていたころの段階ですと、学生がぜんぜん出てこないで、いるのは活動家だけという状況さえあつた。

ところが十一月の段階にはいつてトロツキストの全学バリケード封鎖とのだかといふものが提起され、これを許したら東大は解体してしまうといふふうな状況になって、きょう図書館が封鎖されそうだというと、そこからそれはたいへんだといふんで出てくる。そ

のあとしばらく沈黙していても、こんどは団交がひらかれそうだというふうになり、入試問題だとか留年問題だとか、自分のかわつていける課題として自分に直接的に感じられるような具体的な問題がでてくれば、必ずいっしょにたたかってくれる。こういう行動の様式がひじょうに強いように思う。

ぼくたちが運動をすすめていくさいにはこういう人たちがいなければ、運動が進展しないわけです。そこで、そういう人たちともたたかつていくためにどうしたらいいのかといふのもうひとつの問題がでてくるわけです。ぼくたちが考えていくさいに、そういう人たちがときに戦列から離れて、ぼくたちに不信感をもつて右に左に揺れたりすることはあるわけですけれども、必ず正しい方針を提起し、正しい具体的な行動を提起していくならば、いっしょにやってくれるんだという点に確信をもつて運動をすすめていくということがきわめて重要だと思ひます。具体的な課題をやりぬく統一行動の中で、統一戦線思想をみんなのものにしてゆく、その典型的な成功というのが七学部で団交実現実行委員会を作り、圧倒的な学生を

結集してゆく、この活動だった。駒場の場合は十二月十三日の代議員大会に向けてやられたわけで、その教訓が本郷でも学ばれ、だいたい二千五百から三千の学生が結集した。だいたい半分ちかくになりますね。クラス・学科ごとに「団吏委」がほとんど組織され、しかもそれが全部名簿で、名まえがあがってくるわけです。しかも、それぞれのクラス、学科、あるいは学部の独自性を尊重しつつ、全体として七学部代表団のもとに組織されてゆく。クラスでみんなで金を出しあいヘルメットを購入したり、旗を作ったりする。さらに、これは重要な点ですが、中核部分が行脚隊として組織され、トロツキストの暴力に断固としてたたかうと共に、その他の学生も、いわゆる「市民部隊」や「後衛兵」として任務分担をうけもつ、こうした創意的な統一行動が、十項目「確認書」をかちとったんだと思います。

「大学を根拠地にする」

佐藤 テンポが早いでしょう、五日ぐらいたっちゃうとね、どういうことになっているのかわからなくなって、というのもあるんじゃないか。

湯島 東大闘争にはいろんな局面がありましてたけれども、最近では十二月十三日の駒場の代議員大会を全学が一致して守るという、これはひじょうに印象的なことでした。十二月十三日の原理がずうっと今日まで、東大の解決の方向をさしめしているのとたくしは思えます。こまかいことになりますけれど、では翌日や翌々日にそれだけの人がすぐ集まるかという、駒場へいってでもがらんとしているわけです。これにはいろんな要素がある。まず、大学というのは、登校したからといってすぐ集まれるような場所は、たとえ封鎖されていなくてもないのだということです。(笑い)まして封鎖中ですから、集まって、皆と話したまり場がまったくない。いよいよとなれば自分はデモをみているやじうまになるよりほかはない。組織されざる学生大衆は見物人としての群集にすぎません。こういうところからも大学を根拠地にするという思想ができてこなけりやならない。これがひとつです。

それから、これはかなり専門的なことになるんですが、十三日のあとに、教養学部代表団が即刻認められてしかるべきなのに、なかなか東大当局は認めなかった。教養学部の教

授会が認めたのが十九日だったですね。そうすると、その間に一定の確信をもっていない人は完全に動揺して、体を張ってせつかく大会を守ったけれどもそこでえらばれた代表を学校は認めようとしめない、たちまち無力感となつてもう出てこなくなる。

だから新聞の報道とはちよつとわけがらがうので、学生が登校しないことについてはいろんな根拠があるんです。

しかし、ちよつと樂觀的すぎるかもしれないけれど、いざという時点で、十一月二十二日とか、二十九日とか、十二月十三日とか、実際に学生はできてきている。今後の問題として大学というものを、学生がきたらすぐ集まれる根拠地に、レジデンシャル・カレッジ風にしていなけりやなりません。そういう問題がこの十三日から十九日までのあいだには、「全共闘」とのホットラインを切るか切らないかという高度な議論が大学側の集中的な議論だったから、学生は確信のある以外の人はみんな客体視されちゃったわけです。

その結果無関心がそのあいだにひろく生じたわけです。やはりこまかく議論をしないで、大丸デパートへいってみんなアルバイトやっているそうだなあってんじや。(笑い)し

ろうと議論なんですね。

一面で抱く危惧

吉野 さつき反民青感情の問題で、その原因として指摘されたようなことは同感なんです、ただ反民青感情を強くもっている諸君、これは必ずしも理論的思想的にいってトロツキストとはいえないような諸君ですね。このなかに、戦後民主主義というものへの強い批判というか、否定があるでしょう。それと同時に大学の自治否定論があり、それから代議制民主主義を否定する直接民主主義論というのがありますね。こういうものが出

てくる思想的根拠みたいなもの、このへんはやはり反民青感情と、どこかで結びついているものとして考えたいと思うんです。そういう眼でみた場合に、基本的には一般学生の健全さ、それから大きな民主的なエネルギーになりうるということも認めながらも、やはり一方では現在のトロツキストの役割と関連して、へたをすれば危険なものになりかねない要素をうちに含んでいると思うんです。

戦後民主主義否定論にしても、たしかにそれはわかるわけです。民主主義といても空洞化しているじゃないかということはある意味ではいえるし、それは一面ではブルジョ

ア民主主義にたいする正当な批判ですけれども、にもかかわらず、けっして単純にいいないわけですね。たとえば東大の全共闘の諸君が時計台をあんふうに占拠して大きな顔をしていられるのも、機動隊導入はやっぱりいけないんだ、避けなけりゃいけないんだってことが学生にも教官にも、常識となつて定着していることがあから守られているわけでしょう。かれらとしては自分たちの力で機動隊導入を阻止しているつもりかもしれないけれども、実際はかれらが否定する戦後民主主義の蓄積、あるいは大学の自治を守り、発展させる闘争のつみ重ねがあるからこ

理論政策14号

当面する大学問題の解決のために

日本共産党の主張

11月10日「赤旗」

緊急に解決を必要とする共通の諸点をあきらかにし日本の大学教育の自主的民主的な発展と、大学問題の真の解決の方向をしめす

日本共産党中央委員会
機関紙経営局発行

なが権力が介入できないのだということがあ
るわけですね。

ところがそこに目が向かないで、全面的に
否定している。そうすると、ひじょうに危機
的な状況になったときに、かりにファシズム
というようなものが出てきた場合、とくにこ
れがかつての軍国主義のように上からのファ
シズムじゃなくて、下からの、しかも新しい
新しい装いを持ったファシズムというよう
な様相をとってきた場合、学生諸君のながに
はそれにはたいする抵抗案が、意外に弱いんじ
やないかという危機を一方では感ずるわけ
です。とくに現在のトロツキズムといわれるも
のはむしろ、アナキズムとかサンジカリズ
ムとかと癒着していて、ある意味ではそっち
の方が主要な側面ではないかという気がする
んですけども、そういうものはすぐにでも
そっちの方に転化しかなれないような要素を含
んでいはいはしないかと思うんです。

たとえば、彼らの内部での道徳的退廃と
か、または「日共殺せ、民青殺せ」というス
ローガンを生み出すようなもの、さらに民青
だけでなく、自分に同調しないというだけで
一般学生にも加えるリンチ、そんなものは単
に局部的な現象ではなくて、そういう危険な

傾向の一つの現われではないかという気がし
てならないんです。

そういうものとしてみた場合に、共産党な
りあるいは民青なりというものは、あるいは
日本のマルキシズム全体におきかえてもいい
んですけども、ほんとにそういう非マルキ
シズム的なラディカリズムとの競争ないし闘
争のなかで運動をすすめてきたという経験は
あまりもたないというのが正直なところだ
と思うんです。そういう弱点をもっているとい
うことを認める必要があるんじゃないか。つ
まり国際的にマルクス・レーニン主義の権威
が確立した段階で、日本のマルキシズムは成
立し、前進してきた。もちろんアナ・ボル論
争なんかはありますけれども、あれなんかも
やはり、わりにアナの方がもろくいつている
こともある。

江口 そのへんは率直にいつて、戦前から
の運動の問題だと思えます。あのような治安
維持法というような圧力の下で、民衆運動が
おさえられ、また徹底した反動的な教育体制
の下では、大衆の自主性を背景とした運動を
実践的に組織することは容易でなかつた。
「統一戦線」というようなことが本格的に実
践的に深められて来るのは戦後のことではな

いかと思えます。

現実ととりくむことから

吉野 そういう点でいまそちらからさかん
にいわれている民青の弱点というのも、非マ
ルクス主義的な、自然発生的な運動が出てい
る場合に、それが問題として提起しているも
のをこちらの問題としても受けとめつつ、そ
れが客観的に果たしているマイナスの役割を
厳しく批判していく、それをどう批判する
か、そこがひじょうに弱いということの結果
としてさっきのような弱点が出ているんじや
ないかと思うんですね。だから一方からい
うと、いわゆる進歩的知識人といわれる人び
と、三派、革マルにひじょうにあまいとい
うのも、ある思想なり政治勢力なりが客観的に
はたす役割ということにたいする冷徹な眼と
いうのか、それが弱い。つまり思想なら思想
の動機だとか、それから発想方法だとか、発
想のもとだとかにたいする共感だけで考
えてしまう、それが現在彼らの果たしている役割
を厳しく見られない原因にもなっていると思
うんです。だから、われわれの弱点と、そうい
う知識人の誤りとはある意味では同じ日本の
近代の思想がもっている弱点から出ている二

つものものと言つてもよいかも知れません。そういう眼でみると、学生諸君の現在の高揚というのはひじょうに貴重なものだし、信頼しつつも、そういうものにはたいするわれわれの態度として、それが基本的に正しい方向になるようにどうとり組んでいくかということ、は、ひじょうに重要な、今後まだまだいろいろな形で曲折を経験するような問題なんだろうという気がするんですね。

江口 われわれにとつては「権威」や「教条」によつてではなく、そういうこんどんとした現実にとり組んで自己を立証する以外には、われわれの正しさを主張できないというような心構えの必要がありますね。問題を「上」から考えて、自己の主義や党派の正当性を主張しようとする無限に分裂が続くと思うし、日本の学生運動も若い人たちの運動であるだけに、この問題が純粋な人たちであらわれているように思われます。

湯島 もうひとつ、わたしはスト解除後の思想状況で、東大でいえばクラス連合のような統一行動の思想に達した人も多いけれども、しかし職業的な「全共闘」支持派はいまもいるわけです。この人たちは今後、アナザーズム、サンジカリズムとともに、もうひとつ

つ虚無主義に結びついていくと思うんです。ファシズムの根元ですね。学校へ出てこなくなり、自治会活動にも出ていかなくなるものが予想される非行動的なニヒルな感情というのが前面に出てくるんじゃないかという感じをもちますし、逆にそういう人たちに、民青や民主化行動委員会の人たちは今後どう対応していくかが、根本的な問題になるんじゃないか。こういうむずかしい問題が新しい難問として指導部にふりかかっていると私はみえています。

吉野 たしかに大学のなかにしか目が向かない、権力に目が向かないという要素もあるわけですね。それがあれば、たしかにいまの全体の権力と人民との力関係からいったら、やっぱりこんどの東大闘争というのは大きな前進で、その力関係を大きく変える一歩であるという評価ができると思うんですけれども、にもかかわらず、その大学なら大学のなかだけでみるならば、大闘争をやったわりにはあまり変わっていないんじゃないかという不満が残る人々がいるだろうと思います。

湯島 ま、教授会無傷論……。

吉野 それも一つでしょうね。その場合さつき言われていた欠陥と関連するんですけ

ど、そういうことを感じている層のなかに、大学のなかで矛盾を直接に感じていて、目の前にある壁の厚さをあまりにも大きく感じているために、そこから先に目が向かないという人々がいるんだと思うんですね。その人たちの感じている切実さをいったいどれだけほんとうに自分たちのものにしてきるかということが、いねはその人なちを交えさせられるかどうかのひとつのわかれめになる。その切実さを自分たちは離れたところでも、もつと視野が広くなければいけないんだという形にこららがなっていたら、おそろしく、その人たちも変わつてこないだろうと思うんです。

湯島 その問題がつまり、昨年一月から二月にかけての闘争を民青はどうしていたんだというふうにいわれ、また客観的にいわれどもしかたがないゆえんとだぶってくる。そこらへんはこれからだされるであろう総括が勝った勝ったなんてことになつたりすると、何年前にもどつてしまいます。

「確認書」実現にたつ契機

佐藤 その場合ね、「確認書」について文部省はナイン(否)というだろうと思います

ね。そうすると、ここでもまた一般の学生も「確認書」の内容を実現させるんだというようになる。その契機はあるんじゃないでしょうか。

湯島 それはあります。

佐藤 そこで、一般の学生がほんとうの民主化闘争はここからまた新しく、新しくというか、新段階を劇したうえでひろげなけりやならないんだというふうにとこまで考えられるようになるか……。そうすればはつきり対文部省になりますね、教授会も含めての。

山本 率直に言って、こんなに長くつづくと思わなかったし、こんなに大きくなるとは思わなかった。いままたかかっている東大闘争というのが社会的にどういう意味をもっているのかということ、日本の学生運動史上未曾有のものであること、大学制度全体の今後に関わっていること、こうした点がひしひしと身に迫ってくるまでには、それなりの具体的行動が必要とされた。いままでの学生運動のさまざまな歴史的な蓄積というものはあったわけですけれども、早大闘争の経験をどう生かしていけばいいのか、中大闘争の経験をどう生かしていくのかというさいに、具体的に東大に当てはめていくということが、ある意味ではきわめて困難な状況にあった。

それは、一つには東大が国立立大学であり、旧帝大の頂点として特殊な歴史的位置にあるという問題であり、いま一つは、闘争の性格が、大学の自治の内部での民主化の問題、「教授会自治」論を否定して、新たな管理・運営体制をちかとしてゆくという問題から、大学そのものをどうするのか、社会全体の中で、国家権力との関係で東大をどう民主的に変革してゆくのかという、より普遍的な問題まで深化していったということであり、さらにいえば、東大においてトロツキストの影響力が強く、統一戦線の問題、民主運動の原則の問題での極めて激烈なたたかひが必要とされたということだと思えます。

日本の学生運動史上でいまだかつて提起されたことのないような問題が、あるいは、これまで提起されてきた問題が集約されてぼくたちのたかかつてきた東大闘争のなかにはあったということ、これがいまの時点でやっとなかかつてきたという感じがします。その際に、十一月に出た日本共産党の大学政策が、僕たちのたかかひを進めてゆく上で極めて大きな役割を果たしたということは強調しておきたいですね。

それから、いわゆる一般学生、中間層が、

これからもおそらく右、左とゆれつつ僕たちのたかかひに参加してくると思うんですが、そのさいに、七学部団交でちかちか「確認書」、あれをぼくたちは「基本的な成果」と位置づけているわけですけれども、東大闘争の成果というものを、政府、文部省の攻撃、ないしは独占資本、権力との関係、あるいは七〇年を前にした日本全体の社会情勢のなかで位置づけていくという観点をぬきにして「成果」を語ったら、つまり大学当局とぼくたちとの関係だけで見えたら、さっきおっしゃった「変わらないんじゃないか」という意識がうまれてくるだろうということを痛感するわけです。

僕たちのたかかひにたいしておそらく政府、文部省はあらゆる干渉介入をくわだててくると思えます。東大闘争は、明確に民主勢力と反動勢力の激烈な闘いの焦点になってくると思えます。国家権力は、「確認書」を反古にするあらゆる口実を作ってくるでしょう。学生の中では全く孤立したトロツキスト武装集団「全共闘」を徹底的に泳がせ、何とか一般学生の中に無力感を生み出し、分断をはかり教職員との共闘を困難にしようとするでしょう。

その時に、僕たちは、「確認書」を武器として、これをより一歩前進させ、全学連や全民主勢力との共闘を徹底的に追求しなければ、僕たちの成果の内容は定着しえないと思います。僕たちのたたいは、いわゆる「東大セクト主義」と結びつき、どうしても目が大学内にとじこもりがちだった。しかし、今度は、一般学生も含め、権力との全面的対決、全民主勢力との共闘を考えざるをえない、こういう段階に入ったということです。ここで統一戦線の問題が、つまり学内で、権力に対して左右にゆれがちな一般学生、教官層と、いかに共闘し、七〇年との関係で、トロツキストをどこまで徹底的に孤立させることができるか、これが、今後の全体の闘いのカギになるでしょう。

東大闘争と教官

富田 学生自身の問題はそれでおくとし、教官の方の問題なんです、非常事態だからというんで認められている中央集権的な執行部というものが、既成事実化されてしまいう心配があるわけです。工学部ではとくにそうでしょうが教官のあいだに政治的に無色だからというんで、どんな研究をやっても支配

体制の方に加担していかないのだという、そういう意識をもつ先生が多かったと思う。そういう先生方にたいしいかに問題提起をして、いまの実情ではだめなんだという問題意識をもたせるかということ、それに今一つの問題としていかに教授会の自治というものを確立して、民主主義勢力の力を増大させて、学生・院生・職員とともに大学の自治を強固にうち固めるか、われわれとしても側面援助ということになると思うんですけれども、それをいかにやっていくかということも、ひじょうに大きな課題になると思うんです。

湯島 新聞などの「ノン・ポリ学生」式な一般学生への評価はどれをみても、学生のこのというよりは教官層のことそっくりであつて、ぼくは不思議な気がするんだ。

佐藤 いや、まったく同感だな。(笑い)

江口 その点ではわれわれ教官層の意識にもこの一年、さうとう大きな変化があつて、(笑い)一例をあげると「大衆団交」「全学集会」などという言葉の意味の理解は大きく変わったんじゃないですかね。

湯島 すすんだ内容をもつ「確認書」にもしかし、矛盾が相対的に含まれているわけですから、それを自分の顔に照らしてみると

ちかが出てくるわけでして、そこで今後学生といわず教官といわず、自分の矛盾をすなおに暴露させようかどうかの日本の思想的問題になってきますね。

江口 文学部の処分の問題なんて、去年のはじめだったら、このような本質的な問題として扱われることになるなどと考えた人はほとんどなかったらどう思うますね。

吉野 そういう点でね、わたしはさつきあんなふうにいいましたけれども、「確認書」の意味というのはけつして評価しないわけじゃないんですよ。だいたい、われわれが学生時代に学部共通細則反対なんていたり、それから自治会の中央委員会を交渉団体として認めろなどと主張していたことが、卒業して十年年たって、ようやく通つたようなものなんですからね。それはそれだけでもたいへんなものだってことはわかるわけです、権力との問題だけでなくね。それだけ変えるんだってたいへんなものだという、そこが変わったということはやはり、今後、いろんな問題で変わっていくひとつの大きな流れのいとぐちができていくことだと思えますね。

司会 おいそがしいところを、ありがとございました。(一月十三日)

一九六九年度文学作品募集

日本共産党は、一九六八年度から、全党的な事業として、毎年一回文学作品募集をはじめました。本年度の応募作品については、選考結果と佳作作品(入選作品は各部門ともなし)は、すでに「赤旗」や「文化評論」に発表されていますが、一九六九年度は、新たに「赤旗」連載小説の募集もふくめて、左記の規定でおこないます。

安保条約の「固定期限終了」期である一九七〇年をまえにした、とくに最近十年の党と民主勢力の前進は、民主主義文学の読者層を大きくひろげています。多くの読者は退廃的、反動的な文化のはんらんするもとで、それを圧倒する迫力をもった日本文学の民主的発展を強くのぞんでいます。労働者階級の立場に立つ革命的民主主義文学の新しい才能が育つ可能性が今日ほど大きくなっている時代はありません。今日の時代をどのように生きるべきかについての自覚をうながす、情感にあふれた、新しい作品を人民の生活とたたかいのなから生み出すことは、党と民主勢力の今日的課題の一つです。多くの人がびとが、この文学作品募集にふるって応募されるよう願ってやみません。

応募規定

一、募集部門 「赤旗」連載小説Ⅱ五十回分以上。一回分を四百字詰三枚半にまとめること。長編小説Ⅱ四百字詰三百枚以上。短編小説Ⅱ四百字詰約三十枚から百枚以内。文芸評論Ⅱ四百字詰約五十枚から百枚以内。戯曲Ⅱ枚数を問わない。詩Ⅱ五編以内。行数を問わない。短歌Ⅱ二十首以上三十首以内。俳句Ⅱ二

十句以上三十句以内。

二、締切りは一九六九年七月十五日。「赤旗」連載小説だけは九月末日とする。

三、選考は、中央機関紙編集委員会および「文化評論」編集委員会の責任においておこなひ、各部門について入選作品一編、および選外佳作作品若干を決定する。

四、入選発表は一九六九年十月初旬の「赤旗」および「赤旗」日曜版紙上。「赤旗」連載小説だけは十二月初旬「赤旗」および「赤旗」日曜版紙上。作品は、「赤旗」または「文化評論」に掲載。

五、入選者には、賞状および副賞(原稿料に相当する賞金)を贈呈する。

六、応募資格はとくにない。ただ応募する作品は、サークル誌、同人誌などをふくみどこにも発表したことのないものにかざる。また、入選発表までに応募作品を他に発表したばあいは失格することがある。

七、応募作品は返却しないので、必要なばあいは写しをとっておくこと。

八、応募作品には、住所、氏名、性別および年齢を明記し、かならず作者の略歴をそえること。発表のさいのパネネームは自由。

九、原稿の送り先は、東京都渋谷区千駄ヶ谷四ノ二六ノ七(郵便番号一五一)赤旗編集局または、「文化評論」編集部あて(一九六九年度文学作品応募原稿)と朱書のこと。

十、作品の版權は日本共産党中央委員会出版局に属する。

一九六八年十二月二十一日

日本共産党中央機関紙編集委員会
「文化評論」編集委員会

文化評論

三月号・目次

特集Ⅱ 大学自治の新しい展望

政府の文教政策と大学再
編構想 —その本質とねらい—

岡村辰之…6

大学闘争を敗北にみちびくも
のたち —トロツキストの「大学
コミュニオン論」批判—

河邑重光…20

これからの大学自治
—「大学自治Ⅱ教授会自治」論の誤り—

宇野三郎…30

学生運動上の新しい理論問題

小林栄三…42

「学生の反逆」をめぐって
—最近の論壇の動向を論ず—

河村望…56

産学協同・軍学協同と学
問研究の自由

川崎昭一郎…67

大学の自治をめぐる政党
の態度

吉原次郎…81

座談会 現代学生の意識と行動

—東大闘争の新たな展開のなかで—

江口朴郎 佐藤静夫 吉野淳
湯島一夫 山本衛 宮田欽也

司会・編集部

…90

随想

山本直治同志の思い出
—死後四十周年を記念して—

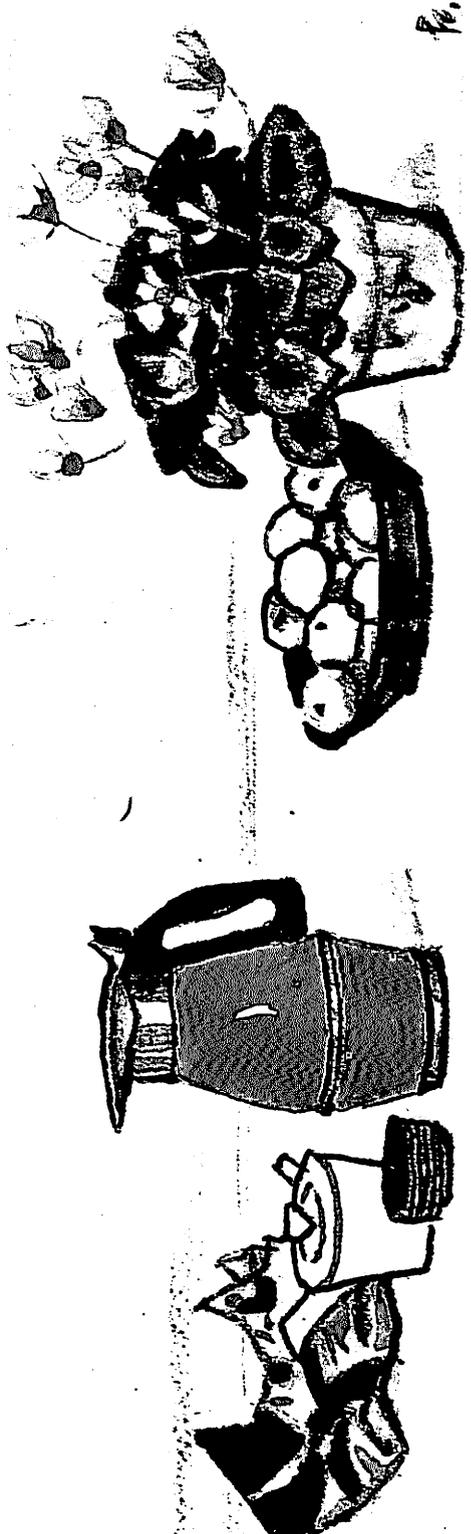
谷口善太郎…107

ベトナム歌舞団の人々
—随行の旅から—

原由子…109

教員と狂人

桜田常久…112



■大学問題の真相をつき、大学問題の自主的民主的解決の道を示す！

当面する大学問題

B6判・二八八頁
価四三〇円

日本共産党中央委員会出版局・発行

▼本書のおもな内容

- 一、当面する大学問題の解決のために
- 二、政府自民党の大学対策
- 三、トロツキストの大学論と教授会自治論
- 四、学園闘争と正当防衛権
- 五、大学問題とその自主的解決

日本共産党中央委員会機関紙経営層発売
東京代々木橋区内 振替東京一九四八九七



2月初旬発売

反動的文教政策、非民主的な大学運営に反対し、またトロツキストの暴力に反対してたちあがった学生、院生、教職員。政府、自民党は火炎びん、凶器などで武装したトロツキストを野放しにし、それを口実に数千の機動隊を学内に侵入させる……そのねらいはなにか。

本書は当面の政治の焦点である「大学問題」に真正面からとりくみ、政府、自民党のねらいトロツキストの役割をあきらかにしつつ、「大学問題」の自主的、民主的な解決の方向を明確に示す。

青少年文化運動

青島道雄・東京郵政組青少年文化分科会著
青少年をめぐる文化状況(教育政策と青少年文化/アムコミと青少年文化)/青少年の生活と意識(子どもの生活時間/子どもの遊びと遊び場/子どもの戦争観と平和観/性の問題)/青少年文化運動の要義(青少年文化運動と教師/学校/学校の文化活動/地域社会と青少年文化運動/学校における部活指導/親子読書運動/礼賛文化運動/演劇教育運動)
B6上装・五八〇円・千七〇円

現代の児童文化

梁谷純作・櫻谷鶴・島越信・石子順・吉田足呂・菅井道智
児童の文化状況をめぐって/児童文化における草園主義の復活/戦後児童文学論(児童雑誌の動向/漫画の現状と思想的傾向/子どものまわり)のこともつと気をつけよう/児童文化運動の課題と展望
B6上装・五八〇円・千七〇円

美学の基礎 (1)

ソ連科学アカデミー研究所編
藤原雅人監修・山村房次訳
A〇判・千七〇円

戦後民主主義 文学運動史 I

佐藤静夫著
四八〇円

映画芸術論

山田和夫著
千九〇円
村上嘉隆著
千七〇円

東京千代田富士見
振替一四一七二七二七
啓隆閣

新しい文学、芸術の創造のために

夜間1か年/週5日(月~金)/授業料(年額)12,000円(分納可)

- 文芸科 (文学、芸術の基礎知識) 30期生 100名
文学入門、日本の現代文学、日本の近代文学、世界近代史と鑑賞、映画、演劇、絵画、音楽、日本史、元、門倉 誠、草鹿外吉、霜多正次、角 圭子、永井 潔、西野辰吉、松本正雄、村山知義、他
- 政経科 (社会科学の基礎) 37期生 150名
政治学、社会学、経済学、心理学、高田 求、中林賢二郎、畑田重夫、堀江正規、森 宏一 他

夜間4か月/週1回(土)/講習料 2,000円

- A(昼) エンゲルス「家族、私有財産、国家の起源」 鳴津千利世
- B(夜) エンゲルス「空想から科学へ」 他 今野武雄

中英労働学院

学院長 堀 真琴
やさしく合理的な国際共通語、エスペ란antoの初歩から実用まで
夜間4か月/週1回(土)/講習料 2,000円
夜間1か年/週5日(月~金)/授業料(年額)12,000円(分納可)
郵便番号 106
106
4月14日(月) 本科には学割発行、入学案内514円切手5枚
東京都港区南麻布2-8-18 電 (451) 2449